アルティス

2 浮いた大陸の少女

体験版

スマホサイズ・背景白……
3

スマホサイズ・背景グレー……
52

……パソコンサイズ・背景白
101

……パソコンサイズ・背景グレー
140

・長い時のなかで

高価な羊皮紙に、羽ペンがカリカリと走る音が小さく響いた。
ゆらゆらと机のランプが手元を柔らかく照らしている。
部屋の中で自分以外の物音はなく、静かなものだった。
キリのいいところで手を止めると、彼はふと窓に目を向けた。
既に日は落ちており、真っ暗だったが、かすかに雲が流れていくのが見える。
ここまでくるのに、本当に長かった。
彼が一息ついていると、部屋の外の廊下からトコトコと足音が聞こえてくる。
「もう、またこんな夜までやってる」
ドアを開けて開口一番、少女は呆れた顔で言った。
彼の元まで歩いてくると、木のカップを手渡してくる。
ほんのりと温かい。
「いつもすまないな」
「そう思ってるんなら、ありがとうって言ってほしいな」

少女がじいっと彼を見つめる。
「そうだったな。いつもありがとう」
「よろしい」
少女は満足したのか、エヘンと胸をはった。
温かいカップの中身をゆっくりと一口飲んだ彼は、それを机に置いた。
「長いことかかってしまったが、もうすぐだよ」
「ホント！？」
少女はその言葉を聞くや否や、目を輝かせて身を乗り出した。
「ああ、本当だよ。待たせてすまなかったな」
彼は愛おしそうに少女を抱き寄せる。
「もう……私、そんな子供じゃないよ」
口ではそう言っているが、少女の方も身を寄せてくる。
「寂しかったか？」
彼は壊れ物を扱うように、少女の髪をゆっくりとなでた。
「……ううん」
少女は、甘えるように頭を彼の胸に押し付ける。

返事が言葉通りの意味ではないことは、他ならぬ彼自身が一番よく知っている。
辺りは静かな空気に包まれていた。
このときの二人の心は、とても温かいものだった。

・新たなる出会い

トマス・オーネルは立ち上がると、背筋を伸ばして腰をトントンと叩いた。
柔らかな日差しが、くすんだ金髪に降り注いでおり、今日も外はいい天気だった。
心地いい風が、くたびれた旅装を揺らしていく。
「こんなもので良かったかしら？」
「ありがとう。これだけあれば十分だよ」
藍色のとんがり帽子に黒いローブ姿の少女、リサ・ワーズノースが歩み寄ってきた。
濡れ羽色の髪を長く伸ばしている彼女は、一流の魔術師にして冒険者である。
トマスはもう一人の少女の方を向いた。
「そっちはどうだい？」
「今持っていきますね」
「うわ、いっぱい採れたねぇ」
「えへへ。摘み始めたら、なんだか楽しくなってきちゃいました」

エリーナ・アステルは楽しそうに茶色の瞳を細めた。
持ってきた薬草の量は、二人の倍ぐらいありそうだった。
彼女は頭を赤いハンカチで包み、肩より少し伸ばした茶色の髪は、耳元の一房だけを三つ編みにしていて、黄色いブラウスと、ハンカチと同じ色のスカートの上から、エプロンをしていた。
髪の間からは、ドワーフ族の証である、控えめに尖った耳が可愛らしくのぞいている。
「こういうのも、ドワーフ族ではよくあることなの？」
「さあ、どうなんでしょうか？　土を触るのは楽しかったですけどね」
不思議に思ったトマスは尋ねてみたが、ドワーフ族の能力ということではないらしい。
トマス達はエリーナの故郷であるスタラントの村を出発し、王都を目指していた。
いくつかの街や村を通り過ぎて、クネスの街に到着したその翌朝、薬草を摘みに街はずれにやってきたのである。
スタラントの村で使ってしまったポーションを補充するのと、この先の旅で必要になるであろうお金を、薬売りであるトマスが稼ぐためでもあった。

地面に置いてある皮のリュックに薬草をしまい終えると、リサが口を開いた。
「さて、薬草も摘んだことだし、もう一度やってみるわよ」
彼女はそう言って、二人から少し距離をとった。
深い海のような色をしている切れ長の瞳をそっと閉じると、同じ色の宝石がついた杖を草原に向けてまっすぐに構える。
彼女が魔術の詠唱を始めると、途中から折れているとんがり帽子とローブが風にはためき始める。
魔術は大気中にあるマナと、自分の魔力を混ぜ合わせることで使うことができるのだ。
詠唱が終わって杖を一振りすると、強い風が巻き起こった。
草原が真っ二つに分かれる。
彼女はトマスに振り返った。
「ほら、教えた通りにやってみなさい」
「よし、やってみるよ」
「トマスさん、頑張ってください」
エリーナの応援を背に受けながら、トマスは身構える。

「風よ……大いなる渦の形となりて、我が敵を引き裂け！　ウインドスラッシャー！」

詠唱が終わると同時に、強い風が巻き起こ――――らなかった。

……街はずれの草原は、少し時が止まったかのようだった。

リサと全く同じ詠唱をして、魔力も確かに練り上げたはずなのに、何も起こらない。

彼女は深々とため息をついた。

「まぁ……予想はしてたけどね」

「おかしいなぁ、ちゃんとできたと思ったんだけどな……」

「全くもって分からないわね。初級のウインドはすぐ使えるようになったのに」

「これ、結構難しい魔術なの？」

「全然。見習いの魔術師でも使える子、普通にいるわよ」

「うむむむ……」

見習いの魔術師と比べられて納得いかない表情を浮かべるトマスは、手の平をじいっと見つめたりしてみるが、それで使えるようになるはずもない。

魔術というのは、向き不向きの素質が人によってある程度決まっている。

苦手な魔術に関しては、全く使えない者も珍しくない。
初級の魔術は使えたのだから、練習を続ければ使える可能性はあるのかもしれないが、今のところ芽が出る様子はなかった。
「じゃあ、氷の魔術は？」
「そっちはもっと期待できないわね。大人しくスクロールに頼ってなさい」
「あ、そう……」
トマスはがくりと首をたれた。
スクロールというのは、魔術陣が書き込まれた紙のことで、魔力を込めるだけで使える便利なもののことである。
ただし、大抵は一度きりの使い捨てで、何度も使えるものは値が張るのである。
「焦ったって仕方ありませんよ。長いこと薬草摘んでいましたし、お昼にしませんか？」
エリーナが慰めるように提案する。
「そうだね。一旦クネスの街まで引き上げようか」
三人が街に引き返そうとしたそのときだった。
エリーナが控えめに尖った耳をピクリと震わせると、草原の奥にある森の方に顔

を向ける。
「何かがこちらに向かってきます！」
トマスとリサは、その言葉に気を引き締める。
ガサッガサガサッ
森の中から飛び出してきたのは、草原などでよく見かけるモンスター、グラスゴブリンだった。
普通のゴブリンと比べて、やや明るい緑色をしている。
折れた剣や粗末なこん棒など、不ぞろいの武器を手に、十体程が群れで襲ってきた。
「エリーナ！　頼むよ！」
「はいっ」
エリーナは腰から護身用の小さな投げ斧を引き抜くと、こちらに迫ってくるグラスゴブリン達の足元に狙いを定めて、斧を投げつける。
ヒュンッと風を切る音を響かせて地面に衝突した斧は、大量の土を派手にめくり上げて、グラスゴブリン達に浴びせかけた。
ドワーフ族であるエリーナは、人間であるトマス達よりも優れた腕の力を持って

いる。
威嚇ではあるものの、その威力は土の魔術に匹敵する程である。
グラスゴブリン達の中に慌てふためく者が出始める。
「炎よ……獣の形となって、我が敵を焼き尽くせ！　フレイムビースト！」
リサがそのスキをついて炎の魔術を放った。
生み出された炎は四本足のトラのような形になって、グラスゴブリンに突っ込んでいく。
魔術師は自分の衣服に特殊な魔術を施すことで、身体だけではなく、身に着けた衣服からもマナを取り込むことができるのだ。
丈の長いローブやとんがり帽子、髪を長く伸ばしているのもそのためだ。
「ギャアアアァァァ！！」
グラスゴブリン達が次々と焼かれていくが、広い場所で戦っているせいか、運よく避けることができた者もいたようだ。
トマスは腰からやや短めのブロードソードを引き抜くと、生き残ったグラスゴブリン達に斬りかかる。
エリーナとリサの手によって、群れは既に壊滅しかかっていた。

倒れたグラスゴブリンの間を縫うように、走りながらトマスが剣を振るっていくと、生き残っていた者達も後を追うようにバタバタと倒れていった。

生き残りがいないことを確認して一息ついたトマスは、エリーナの方を振り返った。

「エリーナ、いつもありがとう」

「いえいえ。私も一緒に旅をしてるんですから、できることをやらないと」

「そんなに気負わなくても大丈夫よ」

斧を回収しているエリーナを眺めながら、トマスはふと思いついたことを尋ねる。

「エリーナ、他の斧は投げられるのかい？」

護身用の斧は、柄の長いとんかち程度の大きさである。

「村で練習してたときに、いくつか試したことはありましたから、一挺か二挺ぐらいなら他の斧でも投げられると思いますよ」

「へぇ……そうなんだ」

ドワーフの村では十歳になる頃には、親から練習させられる話は前に聞いたことがあった。

トマスは森の方へと視線を向ける。

「……何であんな群れが飛び出してきたんだろう」
「確かにそこは気になるところね」
あれだけの群れが一度に出てくることは、滅多にあることではない。
エリーナが感じた様子からしても、こちらを察知して……という風でもなさそうである。
一体何が起こっているのかと三人が考えていたときだった。
エリーナがまたもや振り向くのと、何かが飛び出してくるのは同時だった。
「この野郎！　大人しく待ちやがれってんだ！　……お、おぉ？」
飛び出してきた何者かは、地面に倒れているグラスゴブリン達に驚いていた。

・再会

「わーはっはっは。まさかグラスゴブリン共を追いかけているうちに、お前に出会えるとはな！　ほんと、ビックリしたぞ」
「分かったから離してってば。ちょっと痛いんだけど」
赤銅色の髪の彼は大笑いすると、呆れているトマスの肩をぐいっと引き寄せた。
あれからトマス達は街はずれの草原を引き返して、クネスの街に戻ってきた。
お昼がまだだったので、そのまま彼と一緒に食堂へと向かうことになったのだ。
「それにしてもお前、一人で旅してるって聞いてたんだが、いつの間にかパーティなんて組んじまって、それも綺麗な魔術師の子に、ドワーフ族の可愛い女の子ときたもんだ。お前も隅に置けねえなぁ？」
彼はトマスにニヤニヤした笑みを向ける。
「あのねぇ……僕がどうして旅に出たか、お前は知ってるでしょーが」
「まぁな」
彼はトマスの呆れた顔に満足したのか、肩から手を離すと、笑みを浮かべたまま

リサとエリーナの方に顔を向ける。
「魔術師さんの方はグラスゴブリンのやられようから、相当な腕前なのは間違いない。どう考えても、トマスと釣り合うようには見えないんだよな。んで、そっちのドワーフさんは冒険者って感じでもない。村にいるごく普通の女の子のように俺は感じた。……そんな二人がこいつと一緒にいるってことは……」
今まで成り行きに任せていたリサだったが、彼が言い終わる前に、トマスに真剣な表情を向ける。
「ふっ……そう怖い顔しなさんな。そもそも俺がここまで来たのは、こいつの手助けをするつもりだったからなんだよ。つまり二人は……シズク絡みってことだよな？」
最後だけは彼の声が小さくなった。
イデアのシズク。
それは死んだトマスの父が探してほしいと、トマスに託したものだった。
それが一体何なのかは分からない。
だが、今では大切な願いだったのではないかと思っている。
「……じゃあ、あなたもそうなの？」

リサは真剣な表情を崩さないまま、彼に尋ねる。
「正直なところ、半々ってところだな。俺のオヤジもトマスのオヤジさん達の仲間だったらしくて、一緒に旅してたらしいんだ。だが、身体をダメにしちまったらしくてな。途中でリタイアってわけさ」
「でも、今も生きていらっしゃるなら、詳しい話が聞けるんじゃないんですか？」
エリーナが至極当然な意見を口にする。
「それは難しい話なんだよ、エリーナ」
トマスは苦笑いを浮かべた。
「ど、どうしてですか？」
「トマスのオヤジさん達が死んじまったってのもあるとは思うんだが、オヤジの奴、そのことになると急にダンマリになっちまうんだ。俺はともかく、トマスから聞いても話さない辺り、よっぽどのことなんだろうな」
「そうなんですか……」
「ま、だからって何もしないわけにもいかないしな」
彼はそこで一旦言葉を切った。
リサとエリーナに向きなおる。

「遅くなったが、俺はガストン・ベルナール。この春に王都の騎士養成学校を卒業した自由騎士にして、トマスの小さい頃からのダチってやつさ」

そう言って彼は、二人に自由騎士の証である、小さな赤いメダルを見せる。

彼は赤銅色の髪を短く刈り上げていて、全身を覆うプレートメイルと腰にはバスタードソードという出立ちだった。

イスにはバックラーとロングスピアが立てかけられている。

少女達も自己紹介をする。

「私はエリーナ・アステルって言います。バックパッカーを担当させてもらってます」

バックパッカーとは、荷運び兼パーティー支援役のことである。

エリーナの隣には、トマスのものより二回りは大きい皮のリュックがあった。

「見ての通り、魔術師をやってるわ。……名前はリサ・ワーズノース」

「ん？　ワーズノースってのは……」

「あーはいはい、言いたいことは分かったから」

「ははっ、相当苦労してるみたいだな。これ以上は何も言わねえよ」

「ええ。そうしてくれると助かるわ」

リサはこのやり取りを何度も経験しているのか、うんざりした顔をする。
「この春に卒業……ね、そういえば、もうそんな時期だったわね。……なるほど、あなたがトマスの言っていた彼だったってわけね」
「お？　何だ何だ、俺のこと知ってたのか？」
「二人には、大体のことは話してあるからね」
「そりゃそうか。こんな突拍子もない話、正直に話さないと信じてくれないわな」
「王都の騎士なんてすごいんですね」
その言葉に、ガストンは苦笑いを浮かべる。
「エリーナちゃんにそう言ってもらえるのは嬉しいんだが、俺は平民だからなぁ……騎士を目指す貴族様達の練習相手でしかないのさ」
「ふん、大体騎士なんて、なろうと思ってなれるようなものでもないのよ。それなのに騎士養成学校だなんて、貴族のプライド丸出しみたいで恥ずかしくないのかしら。素直に練兵所とでも言えばいいんだわ」
「ミもフタもねえ言い方だなぁ……まぁ、俺もその意見には賛成だけどよ」
騎士養成学校は、誰でも入れるものの、卒業して正式な騎士になれるのは貴族だけだ。

平民出身の者は、貴族と仲良くなって従騎士にしてもらったり、王都が斡旋している兵士になるなどの道がある。

そしてもう一つ、王都が用意した道が自由騎士である。

要は冒険者なのだが、他の者との違いは授与される小さな赤いメダルにある。

これを持つ限り、自由騎士は魔術師ギルドで優遇してもらえるのだ。

魔術師ギルドは、冒険者の数が減ってきている今では、実質冒険者ギルドのようなものである。

「貴族の方と一緒の学校ですか……やっぱり卒業するときは、お城に呼ばれたりするんですか？」

「まさか。俺達なんて、ただだっ広い広場に集められて、『諸君、この王都のために立ち上がろうではないか』とか何とか、ありがたい話を聞かされて、それでおしまいさ。貴族の奴らは今頃叙任式でもやってるんだろうけどな」

話が一段落したところで、頼んでいた昼食が運ばれてきた。

ガストンが明るい性格なのもあってか、二人とはすぐに馴染めたようで、トマスは一安心だった。

楽しい雰囲気のまま昼食が終わると、店員が食器を回収しながら、飲み物のお代

わりを尋ねてくる。
既にお昼も過ぎていたからか、客はトマス達だけになっていた。
「やっとトマスと再会できたんだ。エールといきたいところだが、果実酒にしとくか」
「僕は果実水で」
「私も果実水にしようかしら。エリーナはどうするの？」
「私も果実……水でお願いします」
「分かったわ。すみませんん、果実酒と果実水、二つずつでお願いします」
その瞬間、エリーナの耳がピクッと動いた。
「リ、リサさんっ」
「あら、何かしら？」
奥へと下がる店員を見送りつつ、リサが涼しい顔で返事をする。
「私、果実水って言いましたよねっ」
「そうだったかしら？　果実酒も果実水も似てるから、気をつけないといけなかったわね。ごめんなさい」
「エリーナ、遠慮しなくていいよ」

「むー」
エリーナが顔を赤くしながら、リサをじろーっと睨むが、リサはどこ吹く風だ。
「ぷっ、お前ら見てると退屈しねえな」
ガストンが吹き出した。
一緒に旅を始めた頃は、実はトマスも気づかなかったことだった。
よくよく考えてみれば、ドワーフ族はお酒が好きなことぐらい当たり前のことなのだが、エリーナはトマスとリサに遠慮してか、自分からお酒を頼むことは全くなかったのだ。
しかし、毎日顔を合わせていると、食事をするたびに、彼女がほんの少しではあるが、妙に物足りなさそうにしていることに、段々と気づいてくるのである。
二人で一緒に何度か尋ねると、彼女は顔を真っ赤にしながら、ようやく答えてくれたのだった。
それでも今みたいに、半ば強引に頼んだりして、やっと口にする程度で、普段は滅多に飲まないのである。
彼女なりに、この旅を真剣に考えているのだと、トマスには分かったが、時には息抜きも必要だ。

リサがこうして時々頼むのは、エリーナを気遣っているからなのだろう。
「さて、と」
リサは懐から書物といくつかの道具を取り出すと、羽ペンで何か書き込み始める。
「それは何だい？」
「魔術書よ。簡単に言えば、自分専用の何度も使えるスクロールってところかしら。一人で旅してたときは必要だとは思わなかったけど、誰かさんといると、いつ危険な目に合うか分からないからね」
「そ、そっか。あはは……」
リサが恨めしそうにトマスを見ると、トマスは苦笑いを浮かべるしかない。
「そういや、二人とどうやって知り合ったのか、聞いてなかったが、その様子だと何かあったみたいだな？　聞かせてくれよ」
「ん、まぁ、色々ね」
「……色々なんてものじゃないでしょう？」
「私はトマスさんに感謝していますよ」
リサが、あなたから話しなさいよと言わんばかりに、含みのある言い方をする。
その一方で、エリーナは優しく微笑んでいた。

頼んだ飲み物が運ばれてきたのをきっかけに、トマスはガストンに話すことにした。

トマス達が知り合うことになったのは、エリーナの故郷、ドワーフの村のスタラントでの出来事だった。

そこでトマスは困っていたエリーナと出会い、宿屋の酒場でリサと出会うことになる。

火竜の洞窟へ探検に出かけた三人は、最深部で石碑と封印された宝石を発見するも、採掘団の護衛の手によって封印は解かれてしまい、宝石の中から出てきたのは、巨大なドラゴンだった。

危うく村が壊滅しそうになるものの、リサの封印魔術で何とか危機を脱したのだった。

その後は、互いの家族が仲間であったことが分かり、今に至るというわけだ。

トマスの懐には、リサの魔術でドラゴンを封印した宝石――炎のシズクがある。

「ドラゴンなんてすげえな……どうやら、一筋縄ではいかなさそうだな」

ガストンは、真剣な表情で腕組みをしながら話を聞いていた。

「……まあ、そんなことがあって、手がかりらしいものは、今は全くないんだ。だ

から一度王都に戻って情報を集めてみようと思うんだ」
「そうだな。今のところはそれが無難かもしれないな」
ガストンも納得して話がまとまりかけたときだった。
――ゴオォォ……ォォ……ン……
食堂の外から、大気を振るわせるような音が響いてきた。
街の人達が音のする場所へと、駆けていくような足音も聞こえてくる。
「あら、珍しいわね。こんなところに星船が着陸するなんて」
「え、星船？」
トマスはその言葉を聞いた途端、ギクリとする。
「あ、あのさぁ、もうご飯も済んだことだし、そろそろ宿の方へ行かないかい？」
足元に置いてあった皮のリュックを、トマスは慌てて背負い始める。
「え？　まだ昼をちょっと過ぎたぐらいだろ？　早くねえか？」
いきなりの提案に、ガストンが目をパチクリとしている。
「ほ、ほらっ、夜になって泊るところがなくなっても困る。
何事も準備はちゃんとしておくべき――」
「いや素晴らしい！　全くもってその通りだね！」

突如そんな声が後ろから聞こえてきたかと思うと、トマスは皮のリュックをバシッと叩かれた。
突然の出来事にびっくりしたトマスだったが、やがて深いため息をついた。
食堂の店員も何事かと、こちらを見ている。
客がトマス達だけになっていたのは幸いだった。
「いきなりですまないが、失礼するよ」
「あ、ちょっと」
声の主である少女は、トマスの皮のリュックに手を突っ込んだ。
慣れた手つきでポーションを取り出すと、勝手に栓を開けてグビグビと飲み始めてしまった。
年若い娘が優雅な仕草で飲んでいるので、様になっているように見えるが、やっていることは酒場の飲んだくれと同じである。
「ふぅ……トマス君、随分と腕を上げたじゃないか。はいコレお代ね」
「ど、どうも……」
トマスの手には多過ぎる代金が乗せられていた。
いきなりの展開に、トマス以外の三人はポカンとしている。

「ほら、さっさと私をみんなに紹介したらどうだね？　仲間の方々が困ってしまっているじゃないか」

トマスは顔を手で覆うと、もう一度深いため息をついた。

「えーっと……この人は僕の知り合いの商人で、ドロシー・ウィッキンズって言うんだ。僕を見かけるたびに、こんなことしてる変な商人さんなんだよ」

「失礼だね君は！　トマス君の作るポーションは美味しいから仕方ないのだ。それに私は星船の船長なのだよ！」

彼女はビシッと指を立てて、ポーズを決めた。

レースのブラウスに、高価そうなシルクのロングスカート、と……ここだけを見れば貴族のお嬢様と言われても納得できそうな服装なのだが、被っているハンチング帽は日に焼けて色あせており、羽織っている皮の上着は、あちこち擦れている上に、隅の方は、ほつれたままになっていて、なんともちぐはぐな格好の少女だった。

初対面の人は判断に困るだろうなとトマスはいつも思う。

「へぇ……俺達とそう歳も変わらなさそうなのに、すげぇんだな」

そんな容姿に構わず、ガストンが素直な感想を言うと、彼女は満足したのか何度もうなずいた。

「うむうむ。実に素晴らしい反応だよ。素直でよろしい。……ところでトマス君、私と一生を共にする覚悟はできたかね？」
「一生をって……えぇっ」
何を想像したのか、エリーナが驚いた顔をする。
「エリーナ、あまり本気にしちゃダメだよ」
「こらこら、トマス君。そうあっさりとバラさないでくれたまえ。私がイケメン君好みなのは確かだがね。言っちゃあ何だが、トマス君は私の好みじゃないねぇ」
「……何でこんなところで着陸したのさ？」
「そりゃ君、今王都のお城では、騎士達の叙任式の真っ最中だからね。これ以上王都を騒がしくするなとのお達しなのさ」
どうやら王都の代わりとして、クネスの街を着陸先に選んだらしい。
「船って……海を渡る乗り物ですよね？」
山育ちのエリーナには、星船というのが、いまいちピンとこないようだ。
「チッチッチ、違うんだな。私の船はなんと、空を飛ぶのだよ！」
ドロシーが人差し指を左右に振ったかと思うと、大仰な仕草で両腕を広げた。
星船は、夜に船を下から見上げた人々が、まるで星々の中に浮いているように見

えたことから、その名が付いたと言われている。
「はぁ……すごいんですねぇ……」
エリーナが感嘆の言葉を口にするが、どっちかというとドロシーの大袈裟な仕草に呑まれているようにも見える。
「フフフ……星船さえあれば、どこへでもビュンビュン行けるからねぇ」
ドロシーは星船の持ち主ではあるものの、形式的には王都の所有物であり、それを借り受けている契約になっているそうだ。
離着陸する場所も、逐一王都に報告する形になっており、言葉通りに自由に動かせるわけではないらしい。
だが、彼女にしてみれば、そんなものは些細なことなのだろう。
「よし、トマス君の顔を眺めるのにも飽きてきた頃だし、そろそろ本題に入ろうじゃないか。ここで云ったのも何かの縁だ。君達、私の星船に乗る気はないかね？」
「……一体何を考えてるのさ」
トマスは呆れた顔をする。
「何、深い意味はないよ。ただ、その方が面白くなるのではないかと私は思うのだよ！」

「ごめん、真面目に聞いた僕が間違ってたよ」
「そんなにつまらない顔をしないでおくれ。まだとっておきのネタがあるんだ。今回の行き先はなんと、空中都市のフェーレなのだ！」
その言葉にガストンが目を見開いた。
「フェーレって……あのフェーレなのか？」
「アハハッ、面白いね君は。私もあちこち行った経験はあるが、地上にもフェーレという場所があるのかい？　そんな面白い情報があるなら、早く教えてくれたまえよ」
空中都市フェーレ。
それは文字通り、空に浮かんでいる大陸にある都市のことである。
地上との距離は、高価な望遠鏡でやっと観測できる程であり、地上の人が気づくことはまずない。
星船自体が、まだ開発されて間もない物であるため、最近になってようやくその名が広まり始めたというわけだ。
「……みんな、どうする？」
いきなりの提案に、当惑するトマスだったが、仲間達に声をかける。

「これといった目的地があったわけじゃねえけどなぁ……」
腕組みをしているガストンは、考えがまとまらないようだ。
エリーナも星船のことを知ったばかりなのもあってか、似たような様子だった。
「私は行ってみてもいいと思うわ」
そんな中リサだけは、はっきりと賛成意見を示した。
彼女に全員の視線が集中する。
魔術書と道具をしまいながら、彼女は言葉を続ける。
「フェーレなんて、行こうと思って行ける場所じゃないし、行く機会もそうそうないわ。……そうだとは思わない？」
トマスをじっと見て話す彼女が、何を言いたいのかすぐに分かった。
確かな手がかりがない今の状態では、どこへ行こうとある意味においては同じことである。　であるならば、行ける機会の限られた場所へ行ってみるというのは、確かに一つの選択肢ではある。
「そうだね。リサの言う通りかもしれない」
トマスはチラッと、ガストンとエリーナの方を見た。
「決まりだな」

「みなさんがそう決めたのなら、私は構いません」
二人はすぐに察したようで、真面目な表情でうなずいた。
「そんなに真面目な顔しなくても、フェーレは怖い所じゃないよー？　地上の街となんにも変わらないから、安心してくれたまえ」
興味津々な顔で成り行きを見守っていたドロシーだったが、自分の望む結果になって満足したようだった。

・星船

食堂を後にしたトマス達は、ドロシーの案内で街はずれまでやってくる。
そこには大きな星船が着陸していた。
外からの見た目は、普通の船とそこまで変わらないが、陸の上に船があるのは、慣れないうちは違和感を感じるかもしれない。
普通の船と違い、人の出入りするところだけ、外板がぽっかりと開いていた。
出入口のすぐそばで、青年が羊皮紙を片手に積荷の確認をしている。
トマス達が近づいていくと、彼が顔を上げた。
彼はくしゃくしゃの髪に、腕まくりしたシャツと長ズボンというラフな格好で、腰にはツールベルトがあった。
「おや、トマスさん。お久しぶりですね」
「久しぶり。元気そうですね」
「ぼちぼちやってますよ」
彼はドロシーの方に顔を向けると、疲れた様子を見せる。

「船長、人だかりの相手と積荷の積み降ろしを人に押し付けて、一体何やってんですか」

「トマス君のポーションを飲んでた！」

「はぁ……すいませんね、ウチの船長が迷惑かけたみたいで。代金十倍ぐらいふんだくっちゃって構いませんから」

「失礼だな君は！　ちゃんとお金は払ったとも！」

「どーせ返事も聞かずに、勝手に飲んだんじゃないんですか？」

「ピンポーン！　正解！」

彼はトマスとドロシー以外の仲間達に顔を向ける。

ぼぉっとしてるように見えるが、これでも彼にとっては真面目な表情である。

「初めての方もいるようですが、いつまでたっても船長が紹介してくれないので、自分から言わせてもらいますね。俺はカルノ・トゥランテって言います。船長の下で雑務やら何やら助手みたいなことやってます。元々は盗賊なんですけどね」

盗賊とはいっても、魔術師ギルドで登録するときの職業名であって、野盗の類ではない。

リサ達の方も、それぞれ自己紹介を済ませる。

「フフッ、魔術師ギルドで捨てられたネコみたいになってたから、私が拾ってあげたのだ！」
「はぁ……こんなことになるなら、付いていかなきゃよかったですかねぇ……」
彼はため息と共に、頭をポリポリとかいた。
「それで船長、今度はどんな悪だくみを思いついたんです？」
「トマス君といい、君といい失礼だなぁ。私はただ面白そうなことをしただけなのに。彼らを星船に乗せてあげようと思ってね」
「……またですか。どうせフェーレまで連れてって『どうだい、私の星船はすごいだろう！』とかやりたいだけでしょうが……」
「むぅ……最近は君もすっかりツレなくなってしまったな。私は悲しいよ」
「俺は初対面からこうでしたけど……王都のお偉いさん方に怒られても知りませんよ」
「私が許されてるのは積荷の運搬だけだがね。つまり、彼らは喋る荷物というわけだね！」
「ただのヘリクツですね」
二人にとってはよくあることのようで、言葉の割には深刻な雰囲気はない。

「あの、本当に良かったんですか？」
エリーナが遠慮がちに尋ねる。
「星船の権限は王都が握ってますが、物資の輸送も重要な国交の一つですからね。自分達が苦労せずに動かせる船長の星船って、ある意味では貴重なものなんですよ」
ドロシーは気に入った人しか星船に乗せる気はないらしく、特に大きな問題にはなっていないらしい。
「それじゃ、積荷もこれで最後なんで、さっさと運んでしまいますね」
カルノは肩を軽く回した。
「では私の星船に案内しようじゃないか！」
ドロシーがウキウキした様子で船内に入っていく。
トマス達もそれに続いた。
船底の部分には、所狭しと積荷が運び込まれている。
生活雑貨から、魔術書らしきものまで、その内容は実に様々だ。
積荷の間を縫うようにして階段へとたどり着くと、上へと登っていく。
ほんのかすかだが、空気の流れるような音が聞こえてくる。
いくつかの部屋を通り過ぎた後、彼女が一つの部屋へと入っていく。

「うぉ……こりゃ、すげぇな……」
ガストンが驚いた声を上げた。
「フフン、ここが星船の操舵室というわけさ！」
その部屋は、床、壁、天井に至るまで、びっしりとスクロールで埋め尽くされていた。
いくつものスクロールが折り重なり、複雑な模様を描きながら、部屋の真ん中に集約されている。
真ん中には、普通の船と同じような舵輪が設置されており、その周囲には八つの方角それぞれ一本ずつと、真ん中に細くて長い、計九本の魔術によるトーチが設置されていた。
今は着陸しているからなのか、どのトーチにも明かりは点いていない。
「中には初めて入ったけど、これはすごいね」
周囲を埋め尽くすスクロールに、トマスは圧倒される。
エリーナは声も出ないのか、ただただ、スクロールを眺めている。
「そうだろう、そうだろう。まずはコレを見て驚いてもらわないとね。星船からの挨拶代わりってやつさ」

ドロシーはそれぞれの反応に満足したのか、腕組みをしながらうなずいていた。
「船長、積み込み終わったんで、離陸してもいいですかね？」
後ろからカルノがやってきて、彼女に尋ねる。
「ちょうどいいや。このまま見てもらおうじゃないか」
ドロシーが楽しそうな顔で快諾する。
見世物じゃないんですけどねぇ……とカルノが言いながら、舵輪を握る。
ガコン、と音がして、彼が舵輪を手前へと少し引いた。
どうやら二段構造になっているらしい。
慣れた手つきで舵輪を右へ回すと、真ん中の細長いトーチの根元が、ほんのりと光り始める。
それに合わせるように、船外で風の音が聞こえ始めてくる。
彼がゆっくりと舵輪を回し続けていると、やがて身体が宙に浮いたような感覚がしてくる。
それと同時にトーチの光が力強いものになり、ゆっくりではあるが、上に登り始める。
「本当に飛ぶんですねぇ……」

エリーナが夢でも見ているような様子で言った。
「なぁ、思ったんだが、こんな何も見えねえ部屋の中で動かしても大丈夫なのか？」
操舵室の様子に圧倒されていたトマスも、ガストンの言葉にふと気づいた。
部屋には窓らしいものがなく、外の様子は伺えないのである。
「不安になる気持ちは分かるがね。スクロールを張る場所は少しでも欲しいし、空に障害物があるわけでもなし。こっちなら、大雨にずぶ濡れにならずに済むだろう？」
よくある質問なのか、ドロシーが案内嬢のように、すらすらと答える。
「周りの様子を見ながら操縦するときは、デッキにある方を使いますが、動力室に近いこっちの方がパワーは出るんで、状況に応じて使い分けているんです」
カルノが補足説明を加える。
「……見事な魔術陣の組み合わせだわ。かなりの腕利きが作ったものなのね」
星船が動き始めてから、縦横無尽に明滅するスクロールを見て、リサがつぶやいた。
「やっぱり、リサ君はそっちかね。一人だけ静かだったから、つまらないなあとは思っていたんだ」

「……それで？　この星船の動力源は何なのかしら？　まさか魔術鉱石を湯水のように使っているわけでもないのでしょう？」

「あはっ、やっぱそこが気になる？　少し動かすだけなら、それでもいけるらしいけどね」

ドロシーは待ってましたと言わんばかりに、にやぁっと笑った。

魔術鉱石とは魔力を含んだ石のことで、高価な武具に使われていると、トマスも聞いたことがあった。

ドロシーはリサの質問には答えずに、クスクスと笑いながら部屋を出ていく。

トマス達を連れて、別の部屋へと移動する。

ある部屋の前にたどり着いたドロシーは、クイクイとまるで対戦相手を挑発するかのように、リサを招き寄せる。

リサを先頭に部屋の中に入っていく。

部屋の中は操舵室と同じように、スクロールで埋め尽くされていた。

操舵室との違いは、部屋の中央に何かが安置されていることだった。

リサが部屋の中央に近づいていった。

「――っ！？」

顔を近づけると、彼女は驚いたのか、大きく肩が跳ねた。
「こ、これってっ――」
ばっとドロシーに顔を向ける。
「ふふふ、いい反応するねぇ。大量の物資を積み込んだ星船がどうして浮くのか、理解できたかね？」
「そんなにすごいものなの？」
トマス達も興味津々で近づいた。
「すごいもなにも……これ、マナクリスタルじゃない！」
「なんだって！」
ガストンが慌てた様子でリサの隣に立った。
トマスとエリーナもそれに続く。
「正確にはカケラだがね。丸々一個というわけでもなし、そんなに大したものでもないさ」
安置されていたのは、小さな宝石のようなものだった。
大きさは、トマスの手の平に乗せれる小石ぐらいに見える。
淡い緑色の燐光を発しながら、その光がスクロールへと流れていく。

「マジかよ……本物なんて初めて見たぜ……」
ガストンが、言葉を絞り出すようにしてつぶやいた。
「それは、私の大じい様が見つけてきたものなのさ。そんな小さな石ころ程度の大きさじゃあ、大した使い道はないと思うがね。でも曲がりなりにもマナクリスタルなんだし、せっかくだから有効活用しようと思ったわけさ」
「……道理で王都が介入したがるわけだわ。星船もそうだけど、こんなもの、個人の手にあっていいものじゃないわ」
マナクリスタルとは、地中深くに埋まっているとされる、膨大な魔力を秘めた鉱物のことで、滅多にお目にかかれるものではない。
大昔から存在すると言われているが、秘めている魔力の総量は現在でも計測不能であり、一説には大気中のマナを吸収して、魔力にしているのではないかと言われている。
国に一個存在するだけで、周辺諸国の力関係さえも変えかねない程のものである。
そんな一抱え程もある鉱物のマナクリスタルだが、それだけの影響力があるにも関わらず、有効活用できる方法は意外と少ない。
理由は単純明快で、秘めている魔力が膨大過ぎて、人間の手に負えないのだ。

魔術に特化した種族であるエルフ族ですら、首を横に振るしかないという。
だがそれでも無尽蔵の魔力を秘めていることに変わりはなく、自然放出される魔力を汲み取って有効活用すれば、大きな利益になると言われている。
「この部屋と操舵室のスクロールで、マナクリスタルを制御してるのか？」
ガストンが尋ねる。
「まさか。カケラとはいえ、マナクリスタルだよ？　制御なんてそんなご大層なものじゃあない」
「星船はマナクリスタルのカケラから放出された魔力を、そのまま風の魔術に変換しているだけなんです」
後ろからやってきたカルノが付け加える。
「着陸しているときなんか、なーんにもしてなくても魔力は垂れ流しっぱなしなのさ。もったいない話だねぇ」
ドロシーは口ではそう言うものの、あまり気にしていないようだ。
彼女にとっては星船が動きさえすれば、それ以外のことはどうでもいいのだろう。
「空を飛ぶ魔術ってあるの？」
トマスはリサの方を見た。

「……あるわけないでしょう、そんなもの。この星船が浮いているのは、風の魔術をずっと使い続けているからよ。それこそ無尽蔵の魔力を持つマナクリスタルでもないと不可能だわ。それと、マナクリスタルは、それぞれから引き出せる力が決まっているの」

つまり、この星船にあるカケラからは、風の魔術にしか転用できないということらしい。

「大じい様なんか、暑いときに役に立ったとか言ってたよ？」

「……なんてことに使ってるのよ」

ドロシーがいたずらっぽい顔でペロッと舌を出すと、リサは顔に手を当てて嘆いていた。

「マナクリスタル……ですか……私、どこかで聞いたことあるような……」

エリーナが、マナクリスタルのカケラを、じっと見つめながらつぶやいた。

淡い燐光に照らされた彼女の横顔は、どこか神々しさを漂わせていた。

「マナクリスタルの伝説は、あちこちにあるからね。エリーナ君に聞き覚えがあっても不思議ではないさ」

ドロシーが肩を竦める。

マナクリスタルのカケラは、星船の動力源であると共に、風の魔術で結界を張って船体を防護するのにも使っているらしい。
「動力の足しになるかと思って、帆を上空で使ってみたんだが、穴だらけになってしまってね。船体はバラバラになりそうだったし、危うく大陸の外にある、ムツカグラまで吹き飛ばされるところだったよ。ふふふっ」
「いや、それは笑えねえだろ」
ガストンが呆れた顔をする。
「ありゃあマジでヤバかったです。死ぬかと思いましたから」
「なぁに、冒険にスリルは付きものさ」
とはいえ、離着陸の微調整として使ったりと、全く出番がないわけではないらしい。
マナクリスタルに関する話が落ち着いたところで、トマス達は動力室を後にする。
「さて、それではカルノ君、晩御飯の準備は任せたよ」
「……また俺ですか。たまには自分でやってくださいよ」
部屋を出て早々、ドロシーがそんなことを言ってのける。
「星船の操縦はいいんですか？」

エリーナが不思議そうな顔をする。
「星船の操縦って、そんなに難しいものじゃないんですよ。今は離陸した直後ですし、大雑把な方角だけ示しておけば大丈夫なんです」
「それに星船は、地上や陸から離れれば離れる程、速度が落ちるんだ。フェーレまで着くのに丸一日かかるんだなぁこれが」
「へぇ……マナクリスタルも万能じゃないのね」
リサが意外そうな表情を浮かべる。
「そりゃそうさ。そうじゃなけりゃ、私の手の中に納まったりしないさ。ちなみに私の星船は、武装の搭載は許可されてないんだ。私が反乱など企てようものなら、ノロノロ運航の星船なんか、大砲一発で撃墜されてしまうのだよ」
「え、武器なんかもダメなのか？」
「冒険者がするような、個人の武装は構いませんけどね。さすがにその辺りは、王都のチェックも厳しいです」
「そういうことだから、何かあったときは、諸君に任せるよ。私は土の魔術しか使えないんだ。空にいることが多いのに、これは皮肉でしかないねぇ……アハハッ、こりゃ愉快だ」

ドロシーは何が面白いのか、自分の言ったことにウケている。
そして、いたずらっぽい顔でチラリとトマスの方を見やった。
「まぁ……トマス君も似たようなものだよね」
「……見てたの？」
トマスは苦笑いを浮かべる。
「リサ君が見事な魔術を披露しているのに、トマス君は……ぷぷっ、そよ風も起こらなかったねぇ……」
「船長が飛び出していったのは、それを見たからですか。なんで慌てて走っていったのか、ずっと不思議だったんですよ」
カルノは納得した様子で、ため息をついた。

・空中都市フェーレ

ドロシーの案内で、次の日にデッキへと移動したトマス達が見たのは、おとぎ話に出てきそうな光景だった。

どこを見渡しても、雲、雲、雲。

視界に広がるのは、果てまで続く真っ白な世界だった。

雲海のすき間にひっそりと収まるように、その都市はあった。

それは文字通り、空に浮いた大陸である。

その都市の街並みは、大理石のように真っ白なものが多い。

空中に浮いているから、他国からの侵略を受けるようなこともないらしく、古い立派な建物も所々に見受けられる。

土地が限られているという事情からなのか、縦に細長い建物がいくつも建っていた。

星船が着陸したときの様子は、思っていたよりも普通だった。

てっきり街の人々が、大人数で殺到してくるのかと思ったが、すっかり慣れてしまっているらしく、あ、また来たのか、というような感じだった。

まるで駅馬車のような反応である。

「本当に地上と変わらないんだね」

「ふふっ、何だいその反応は。英雄のように出迎えてほしかったのかね？」

トマスが正直な感想を口にすると、ドロシーは、してやったりといった感じで、ニヤニヤしていた。

彼女は皮のカバンをプラプラと手にしている。

トマス達は、彼女に案内してもらいながら、フェーレの街中を歩いている。

最初は積荷を下ろす作業を始めるのかと思ったが、まずは責任者に挨拶をするのが、ここでの取り決めらしい。

彼女が言っていた通り、空に浮いているということ以外は、至って普通の街だった。

街の人達が奇抜な格好をしていたり、自分達を奇異の目で見るようなこともない。

高い建物が比較的多いのは珍しいものの、他の街との大きな違いは、それぐらいしかなかった。

「着いたよ。ここが目的地さ」
ドロシーが足を止めたのは、まるで神殿のような建物だった。

・あとがき

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。
体験版はいかがでしたでしょうか？
この後、彼らは大きな出来事に巻き込まれていくことになります。
なお、製品版には、さやかですが、おまけの短編も付いてます。
それでは製品版でお会いできることを願っております。
貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。

・長い時のなかで

高価な羊皮紙に、羽ペンがカリカリと走る音が小さく響いた。
ゆらゆらと机のランプが手元を柔らかく照らしている。
部屋の中で自分以外の物音はなく、静かなものだった。
キリのいいところで手を止めると、彼はふと窓に目を向けた。
既に日は落ちており、真っ暗だったが、かすかに雲が流れていくのが見える。
ここまでくるのに、本当に長かった。
彼が一息ついていると、部屋の外の廊下からトコトコと足音が聞こえてくる。
「もう、またこんな夜までやってる」
ドアを開けて開口一番、少女は呆れた顔で言った。
彼の元まで歩いてくると、木のカップを手渡してくる。
ほんのりと温かい。
「いつもすまないな」
「そう思ってるんなら、ありがとうって言ってほしいな」

少女がじいっと彼を見つめる。
「そうだったな。いつもありがとう」
「よろしい」
少女は満足したのか、エヘンと胸をはった。
温かいカップの中身をゆっくりと一口飲んだ彼は、それを机に置いた。
「長いことかかってしまったが、もうすぐだよ」
「ホント！？」
少女はその言葉を聞くや否や、目を輝かせて身を乗り出した。
「ああ、本当だよ。待たせてすまなかったな」
彼は愛おしそうに少女を抱き寄せる。
「もう……私、そんな子供じゃないよ」
口ではそう言っているが、少女の方も身を寄せてくる。
「寂しかったか？」
彼は壊れ物を扱うように、少女の髪をゆっくりとなでた。
「……ううん」
少女は、甘えるように頭を彼の胸に押し付ける。

返事が言葉通りの意味ではないことは、他ならぬ彼自身が一番よく知っている。
辺りは静かな空気に包まれていた。
このときの二人の心は、とても温かいものだった。

・新たなる出会い

トマス・オーネルは立ち上がると、背筋を伸ばして腰をトントンと叩いた。
柔らかな日差しが、くすんだ金髪に降り注いでおり、今日も外はいい天気だった。
心地いい風が、くたびれた旅装を揺らしていく。
「こんなもので良かったかしら？」
「ありがとう。これだけあれば十分だよ」
藍色のとんがり帽子に黒いローブ姿の少女、リサ・ワーズノースが歩み寄ってきた。
濡れ羽色の髪を長く伸ばしている彼女は、一流の魔術師にして冒険者である。
トマスはもう一人の少女の方を向いた。
「そっちはどうだい？」
「今持っていきますね」
「うわ、いっぱい採れたねぇ」
「えへへ。摘み始めたら、なんだか楽しくなってきちゃいました」

エリーナ・アステルは楽しそうに茶色の瞳を細めた。
持ってきた薬草の量は、二人の倍ぐらいありそうだった。
彼女は頭を赤いハンカチで包み、肩より少し伸ばした茶色の髪は、耳元の一房だけを三つ編みにしていて、黄色いブラウスと、ハンカチと同じ色のスカートの上から、エプロンをしていた。
髪の間からは、ドワーフ族の証である、控えめに尖った耳が可愛らしくのぞいている。
「こういうのも、ドワーフ族ではよくあることなの？」
「さあ、どうなんでしょうか？　土を触るのは楽しかったですけどね」
不思議に思ったトマスは尋ねてみたが、ドワーフ族の能力ということではないらしい。
トマス達はエリーナの故郷であるスタラントの村を出発し、王都を目指していた。
いくつかの街や村を通り過ぎて、クネスの街に到着したその翌朝、薬草を摘みに街はずれにやってきたのである。
スタラントの村で使ってしまったポーションを補充するのと、この先の旅で必要になるであろうお金を、薬売りであるトマスが稼ぐためでもあった。

地面に置いてある皮のリュックに薬草をしまい終えると、リサが口を開いた。
「さて、薬草も摘んだことだし、もう一度やってみるわよ」
彼女はそう言って、二人から少し距離をとった。
深い海のような色をしている切れ長の瞳をそっと閉じると、同じ色の宝石がついた杖を草原に向けてまっすぐに構える。
彼女が魔術の詠唱を始めると、途中から折れているとんがり帽子とローブが風にはためき始める。
魔術は大気中にあるマナと、自分の魔力を混ぜ合わせることで使うことができるのだ。
詠唱が終わって杖を一振りすると、強い風が巻き起こった。
草原が真っ二つに分かれる。
彼女はトマスに振り返った。
「ほら、教えた通りにやってみなさい」
「よし、やってみるよ」
「トマスさん、頑張ってください」
エリーナの応援を背に受けながら、トマスは身構える。

「風よ……大いなる渦の形となりて、我が敵を引き裂け！　ウインドスラッシャー！」

詠唱が終わると同時に、強い風が巻き起こ――――らなかった。

……街はずれの草原は、少し時が止まったかのようだった。

リサと全く同じ詠唱をして、魔力も確かに練り上げたはずなのに、何も起こらない。

彼女は深々とため息をついた。

「まぁ……予想はしてたけどね」

「おかしいなぁ、ちゃんとできたと思ったんだけどな……」

「全くもって分からないわね。初級のウインドはすぐ使えるようになったのに」

「これ、結構難しい魔術なの？」

「全然。見習いの魔術師でも使える子、普通にいるわよ」

「うむむむ……」

見習いの魔術師と比べられて納得いかない表情を浮かべるトマスは、手の平をじいっと見つめたりしてみるが、それで使えるようになるはずもない。

魔術というのは、向き不向きの素質が人によってある程度決まっている。

苦手な魔術に関しては、全く使えない者も珍しくない。
初級の魔術は使えたのだから、練習を続ければ使える可能性はあるのかもしれないが、今のところ芽が出る様子はなかった。
「じゃあ、氷の魔術は？」
「そっちはもっと期待できないわね。大人しくスクロールに頼ってなさい」
「あ、そう……」
トマスはがくりと首をたれた。
スクロールというのは、魔術陣が書き込まれた紙のことで、魔力を込めるだけで使える便利なもののことである。
ただし、大抵は一度きりの使い捨てで、何度も使えるものは値が張るのである。
「焦ったって仕方ありませんよ。長いこと薬草摘んでいましたし、お昼にしませんか？」
エリーナが慰めるように提案する。
「そうだね。一旦クネスの街まで引き上げようか」
三人が街に引き返そうとしたそのときだった。
エリーナが控えめに尖った耳をピクリと震わせると、草原の奥にある森の方に顔

を向ける。
「何かがこちらに向かってきます！」
トマスとリサは、その言葉に気を引き締める。
ガサッガサガサッ
森の中から飛び出してきたのは、草原などでよく見かけるモンスター、グラスゴブリンだった。
普通のゴブリンと比べて、やや明るい緑色をしている。
折れた剣や粗末なこん棒など、不ぞろいの武器を手に、十体程が群れで襲ってきた。
「エリーナ！　頼むよ！」
「はいっ」
エリーナは腰から護身用の小さな投げ斧を引き抜くと、こちらに迫ってくるグラスゴブリン達の足元に狙いを定めて、斧を投げつける。
ヒュンッと風を切る音を響かせて地面に衝突した斧は、大量の土を派手にめくり上げて、グラスゴブリン達に浴びせかけた。
ドワーフ族であるエリーナは、人間であるトマス達よりも優れた腕の力を持って

いる。
威嚇ではあるものの、その威力は土の魔術に匹敵する程である。
グラスゴブリン達の中に慌てふためく者が出始める。
「炎よ……獣の形となりて、我が敵を焼き尽くせ！　フレイムビースト！」
リサがそのスキをついて炎の魔術を放った。
生み出された炎は四本足のトラのような形になって、グラスゴブリンに突っ込んでいく。
魔術師は自分の衣服に特殊な魔術を施すことで、身体だけではなく、身に着けた衣服からもマナを取り込むことができるのだ。
丈の長いローブやとんがり帽子、髪を長く伸ばしているのもそのためだ。
「ギャアアアァァァ！！」
グラスゴブリン達が次々と焼かれていくが、広い場所で戦っているせいか、運よく避けることができた者もいたようだ。
トマスは腰からやや短めのブロードソードを引き抜くと、生き残ったグラスゴブリン達に斬りかかる。
エリーナとリサの手によって、群れは既に壊滅しかかっていた。

倒れたグラスゴブリンの間を縫うように、走りながらトマスが剣を振るっていくと、生き残っていた者達も後を追うようにバタバタと倒れていった。

生き残りがいないことを確認して一息ついたトマスは、エリーナの方を振り返った。

「エリーナ、いつもありがとう」

「いえいえ。私も一緒に旅をしてるんですから、できることをやらないと」

「そんなに気負わなくても大丈夫よ」

斧を回収しているエリーナを眺めながら、トマスはふと思いついたことを尋ねる。

「エリーナ、他の斧は投げられるのかい？」

護身用の斧は、柄の長いとんかち程度の大きさである。

「村で練習してたときに、いくつか試したことはありましたから、一挺か二挺ぐらいなら他の斧でも投げられると思いますよ」

「へぇ……そうなんだ」

ドワーフの村では十歳になる頃には、親から練習させられる話は前に聞いたことがあった。

トマスは森の方へと視線を向ける。

「……何であんな群れが飛び出してきたんだろう」
「確かにそこは気になるところね」
あれだけの群れが一度に出てくることは、滅多にあることではない。
エリーナが感じた様子からしても、こちらを察知して……という風でもなさそうである。
一体何が起こっているのかと三人が考えていたときだった。
エリーナがまたもや振り向くのと、何かが飛び出してくるのは同時だった。
「この野郎！　大人しく待ちやがれってんだ！　……お、おぉ？」
飛び出してきた何者かは、地面に倒れているグラスゴブリン達に驚いていた。

・再会

「わーはっはっは。まさかグラスゴブリン共を追いかけているうちに、お前に出会えるとはな！　ほんと、ビックリしたぞ」

「分かったから離してってば。ちょっと痛いんだけど」

赤銅色の髪の彼は大笑いすると、呆れているトマスの肩をぐいっと引き寄せた。

あれからトマス達は街はずれの草原を引き返して、クネスの街に戻ってきた。

お昼がまだだったので、そのまま彼と一緒に食堂へと向かうことになったのだ。

「それにしてもお前、一人で旅してるって聞いてたんだが、いつの間にかパーティなんて組んじまって、それも綺麗な魔術師の子に、ドワーフ族の可愛い女の子ときたもんだ。お前も隅に置けねえなぁ？」

彼はトマスにニヤニヤした笑みを向ける。

「あのねぇ……僕がどうして旅に出たか、お前は知ってるでしょーが」

「まぁな」

彼はトマスの呆れた顔に満足したのか、肩から手を離すと、笑みを浮かべたまま

リサとエリーナの方に顔を向ける。
「魔術師さんの方はグラスゴブリンのやられようから、相当な腕前なのは間違いない。どう考えても、トマスと釣り合うようには見えないんだよな。んで、そっちのドワーフさんは冒険者って感じでもない。村にいるごく普通の女の子のように俺は感じた。……そんな二人がこいつと一緒にいるってことは……」
今まで成り行きに任せていたリサだったが、彼が言い終わる前に、トマスに真剣な表情を向ける。
「ふっ……そう怖い顔しなさんな。そもそも俺がここまで来たのは、こいつの手助けをするつもりだったからなんだよ。つまり二人は……シズク絡みってことだよな？」
最後だけは彼の声が小さくなった。
イデアのシズク。
それは死んだトマスの父が探してほしいと、トマスに託したものだった。
それが一体何なのかは分からない。
だが、今では大切な願いだったのではないかと思っている。
「……じゃあ、あなたもそうなの？」

リサは真剣な表情を崩さないまま、彼に尋ねる。
「正直なところ、半々ってところだな。俺のオヤジもトマスのオヤジさん達の仲間だったらしくて、一緒に旅してたらしいんだ。だが、身体をダメにしちまったらしくてな。途中でリタイアってわけさ」
「でも、今も生きていらっしゃるなら、詳しい話が聞けるんじゃないんですか？」
エリーナが至極当然な意見を口にする。
「それは難しい話なんだよ、エリーナ」
トマスは苦笑いを浮かべた。
「ど、どうしてですか？」
「トマスのオヤジさん達が死んじまったってのもあるとは思うんだが、オヤジの奴、そのことになると急にダンマリになっちまうんだ。俺はともかく、トマスから聞いても話さない辺り、よっぽどのことなんだろうな」
「そうなんですか……」
「ま、だからって何もしないわけにもいかないしな」
彼はそこで一旦言葉を切った。
リサとエリーナに向きなおる。

「遅くなったが、俺はガストン・ベルナール。この春に王都の騎士養成学校を卒業した自由騎士にして、トマスの小さい頃からのダチってやつさ」

そう言って彼は、二人に自由騎士の証である、小さな赤いメダルを見せる。

彼は赤銅色の髪を短く刈り上げていて、全身を覆うプレートメイルと腰にはバスタードソードという出立ちだった。

イスにはバックラーとロングスピアが立てかけられている。

少女達も自己紹介をする。

「私はエリーナ・アステルって言います。バックパッカーを担当させてもらってます」

バックパッカーとは、荷運び兼パーティー支援役のことである。

エリーナの隣には、トマスのものより二回りは大きい皮のリュックがあった。

「見ての通り、魔術師をやってるわ。……名前はリサ・ワーズノース」

「ん？　ワーズノースってのは……」

「あーはいはい、言いたいことは分かったから」

「ははっ、相当苦労してるみたいだな。これ以上は何も言わねえよ」

「ええ。そうしてくれると助かるわ」

リサはこのやり取りを何度も経験しているのか、うんざりした顔をする。
「この春に卒業……ね、そういえば、もうそんな時期だったわね。……なるほど、あなたがトマスの言っていた彼だったってわけね」
「お？　何だ何だ、俺のこと知ってたのか？」
「二人には、大体のことは話してあるからね」
「そりゃそうか。こんな突拍子もない話、正直に話さないと信じてくれないわな」
「王都の騎士なんてすごいんですね」
その言葉に、ガストンは苦笑いを浮かべる。
「エリーナちゃんにそう言ってもらえるのは嬉しいんだが、俺は平民だからなぁ……騎士を目指す貴族様達の練習相手でしかないのさ」
「ふん、大体騎士なんて、なろうと思ってなれるようなものでもないのよ。それなのに騎士養成学校だなんて、貴族のプライド丸出しみたいで恥ずかしくないのかしら。素直に練兵所とでも言えばいいんだわ」
「ミもフタもねえ言い方だなぁ……まぁ、俺もその意見には賛成だけどよ」
騎士養成学校は、誰でも入れるものの、卒業して正式な騎士になれるのは貴族だけだ。

平民出身の者は、貴族と仲良くなって従騎士にしてもらったり、王都が斡旋している兵士になるなどの道がある。

そしてもう一つ、王都が用意した道が自由騎士である。

要は冒険者なのだが、他の者との違いは授与される小さな赤いメダルにある。

これを持つ限り、自由騎士は魔術師ギルドで優遇してもらえるのだ。

魔術師ギルドは、冒険者の数が減ってきている今では、実質冒険者ギルドのようなものである。

「貴族の方と一緒の学校ですか……やっぱり卒業するときは、お城に呼ばれたりするんですか？」

「まさか。俺達なんて、だだっ広い広場に集められて、『諸君、この王都のために立ち上がろうではないか』とか何とか、ありがたい話を聞かされて、それでおしまいさ。貴族の奴らは今頃叙任式でもやってるんだろうけどな」

話が一段落したところで、頼んでいた昼食が運ばれてきた。

ガストンが明るい性格なのもあってか、二人とはすぐに馴染めたようで、トマスは一安心だった。

楽しい雰囲気のまま昼食が終わると、店員が食器を回収しながら、飲み物のお代

わりを尋ねてくる。
既にお昼も過ぎていたからか、客はトマス達だけになっていた。
「やっとトマスと再会できたんだ。エールといきたいところだが、果実酒にしとくか」
「僕は果実水で」
「私も果実水にしようかしら。エリーナはどうするの？」
「私も果実……水でお願いします」
「分かったわ。すみませんん、果実酒と果実水、二つずつでお願いします」
その瞬間、エリーナの耳がピクッと動いた。
「リ、リサさんっ」
「あら、何かしら？」
奥へと下がる店員を見送りつつ、リサが涼しい顔で返事をする。
「私、果実水って言いましたよねっ」
「そうだったかしら？　果実酒も果実水も似てるから、気をつけないといけなかったわね。ごめんなさい」
「エリーナ、遠慮しなくていいよ」

「むー」
エリーナが顔を赤くしながら、リサをじろーっと睨むが、リサはどこ吹く風だ。
「ぷっ、お前ら見てると退屈しねえな」
ガストンが吹き出した。
一緒に旅を始めた頃は、実はトマスも気づかなかったことだった。
よくよく考えてみれば、ドワーフ族はお酒が好きなことぐらい当たり前のことなのだが、エリーナはトマスとリサに遠慮してか、自分からお酒を頼むことは全くなかったのだ。
しかし、毎日顔を合わせていると、食事をするたびに、彼女がほんの少しではあるが、妙に物足りなさそうにしていることに、段々と気づいてくるのである。
二人で一緒に何度か尋ねると、彼女は顔を真っ赤にしながら、ようやく答えてくれたのだった。
それでも今みたいに、半ば強引に頼んだりして、やっと口にする程度で、普段は滅多に飲まないのである。
彼女なりに、この旅を真剣に考えているのだと、トマスには分かったが、時には息抜きも必要だ。

リサがこうして時々頼むのは、エリーナを気遣っているからなのだろう。
「さて、と」
リサは懐から書物といくつかの道具を取り出すと、羽ペンで何か書き込み始める。
「それは何だい？」
「魔術書よ。簡単に言えば、自分専用の何度も使えるスクロールってところかしら。一人で旅してたときは必要だとは思わなかったけど、誰かさんといると、いつ危険な目に合うか分からないからね」
「そ、そっか。あはは……」
リサが恨めしそうにトマスを見ると、トマスは苦笑いを浮かべるしかない。
「そういや、二人とどうやって知り合ったのか、聞いてなかったが、その様子だと何かあったみたいだな？　聞かせてくれよ」
「ん、まぁ、色々ね」
「……色々なんてものじゃないでしょう？」
「私はトマスさんに感謝していますよ」
リサが、あなたから話しなさいよと言わんばかりに、含みのある言い方をする。
その一方で、エリーナは優しく微笑んでいた。

頼んだ飲み物が運ばれてきたのをきっかけに、トマスはガストンに話すことにした。

トマス達が知り合うことになったのは、エリーナの故郷、ドワーフの村のスタラントでの出来事だった。

そこでトマスは困っていたエリーナと出会い、宿屋の酒場でリサと出会うことになる。

火竜の洞窟へ探検に出かけた三人は、最深部で石碑と封印された宝石を発見するも、採掘団の護衛の手によって封印は解かれてしまい、宝石の中から出てきたのは、巨大なドラゴンだった。

危うく村が壊滅しそうになるものの、リサの封印魔術で何とか危機を脱したのだった。

その後は、互いの家族が仲間であったことが分かり、今に至るというわけだ。

トマスの懐には、リサの魔術でドラゴンを封印した宝石――炎のシズクがある。

「ドラゴンなんてすげえな……どうやら、一筋縄ではいかなさそうだな」

ガストンは、真剣な表情で腕組みをしながら話を聞いていた。

「……まあ、そんなことがあって、手がかりらしいものは、今は全くないんだ。だ

から一度王都に戻って情報を集めてみようと思うんだ」
「そうだな。今のところはそれが無難かもしれないな」
ガストンも納得して話がまとまりかけたときだった。
――ゴオォォ……ォォ……ン……
食堂の外から、大気を振るわせるような音が響いてきた。
街の人達が音のする場所へと、駆けていくような足音も聞こえてくる。
「あら、珍しいわね。こんなところに星船が着陸するなんて」
「え、星船？」
トマスはその言葉を聞いた途端、ギクリとする。
「あ、あのさぁ、もうご飯も済んだことだし、そろそろ宿の方へ行かないかい？」
足元に置いてあった皮のリュックを、トマスは慌てて背負い始める。
「え？　まだ昼をちょっと過ぎたぐらいだろ？　早くねえか？」
いきなりの提案に、ガストンが目をパチクリとしている。
「ほ、ほらっ、夜になって泊るところがなくなっても困る。
何事も準備はちゃんとしておくべき――」
「いや素晴らしい！　全くもってその通りだね！」
じゃないか。そうでしょ？

突如そんな声が後ろから聞こえてきたかと思うと、トマスは皮のリュックをバシッと叩かれた。
突然の出来事にびっくりしたトマスだったが、やがて深いため息をついた。
食堂の店員も何事かと、こちらを見ている。
客がトマス達だけになっていたのは幸いだった。
「いきなりですまないが、失礼するよ」
「あ、ちょっと」
声の主である少女は、トマスの皮のリュックに手を突っ込んだ。
慣れた手つきでポーションを取り出すと、勝手に栓を開けてグビグビと飲み始めてしまった。
年若い娘が優雅な仕草で飲んでいるので、様になっているように見えるが、やっていることは酒場の飲んだくれと同じである。
「ふぅ……トマス君、随分と腕を上げたじゃないか。はいコレお代ね」
「ど、どうも……」
トマスの手には多過ぎる代金が乗せられていた。
いきなりの展開に、トマス以外の三人はポカンとしている。

「ほら、さっさと私をみんなに紹介したらどうだね？　仲間の方々が困ってしまっているじゃないか」

トマスは顔を手で覆うと、もう一度深いため息をついた。

「えーっと……この人は僕の知り合いの商人で、ドロシー・ウィッキンズって言うんだ。僕を見かけるたびに、こんなことしてる変な商人さんなんだよ」

「失礼だね君は！　トマス君の作るポーションは美味しいから仕方ないのだ。それに私は星船の船長なのだよ！」

彼女はビシッと指を立てて、ポーズを決めた。

レースのブラウスに、高価そうなシルクのロングスカート、と……ここだけを見れば貴族のお嬢様と言われても納得できそうな服装なのだが、被っているハンチング帽は日に焼けて色あせており、羽織っている皮の上着は、あちこち擦れている上に、隅の方は、ほつれたままになっていて、なんともちぐはぐな格好の少女だった。

初対面の人は判断に困るだろうなとトマスはいつも思う。

「へぇ……俺達とそう歳も変わらなさそうなのに、すげぇんだな」

そんな容姿に構わず、ガストンが素直な感想を言うと、彼女は満足したのか何度もうなずいた。

「うむうむ。実に素晴らしい反応だよ。素直でよろしい。……ところでトマス君、私と一生を共にする覚悟はできたかね？」
「一生をって……えぇっ」
何を想像したのか、エリーナが驚いた顔をする。
「エリーナ、あまり本気にしちゃダメだよ」
「こらこら、トマス君。そうあっさりとバラさないでくれたまえ。私がイケメン君好みなのは確かだがね。言っちゃあ何だが、トマス君は私の好みじゃないねぇ」
「……何でこんなところで着陸したのさ？」
「そりゃ君、今王都のお城では、騎士達の叙任式の真っ最中だからね。これ以上王都を騒がしくするなとのお達しなのさ」
どうやら王都の代わりとして、クネスの街を着陸先に選んだらしい。
「船って……海を渡る乗り物ですよね？」
山育ちのエリーナには、星船というのが、いまいちピンとこないようだ。
「チッチッチ、違うんだな。私の船はなんと、空を飛ぶのだよ！」
ドロシーが人差し指を左右に振ったかと思うと、大仰な仕草で両腕を広げた。
星船は、夜に船を下から見上げた人々が、まるで星々の中に浮いているように見

えたことから、その名が付いたと言われている。
「はぁ……すごいんですねぇ……」
エリーナが感嘆の言葉を口にするが、どっちかというとドロシーの大袈裟な仕草に呑まれているようにも見える。
「フフフ……星船さえあれば、どこへでもビュンビュン行けるからねぇ」
ドロシーは星船の持ち主ではあるものの、形式的には王都の所有物であり、それを借り受けている契約になっているそうだ。
離着陸する場所も、逐一王都に報告する形になっており、言葉通りに自由に動かせるわけではないらしい。
だが、彼女にしてみれば、そんなものは些細なことなのだろう。
「よし、トマス君の顔を眺めるのにも飽きてきた頃だし、そろそろ本題に入ろうじゃないか。ここで云ったのも何かの縁だ。君達、私の星船に乗る気はないかね？」
「……一体何を考えてるのさ」
トマスは呆れた顔をする。
「何、深い意味はないよ。ただ、その方が面白くなるのではないかと私は思うのだよ！」

「ごめん、真面目に聞いた僕が間違ってたよ」
「そんなにつまらない顔をしないでおくれ。まだとっておきのネタがあるんだ。今回の行き先はなんと、空中都市のフェーレなのだ！」
その言葉にガストンが目を見開いた。
「フェーレって……あのフェーレなのか？」
「アハハッ、面白いね君は。私もあちこち行った経験はあるが、地上にもフェーレという場所があるのかい？　そんな面白い情報があるなら、早く教えてくれたまえよ」
空中都市フェーレ。
それは文字通り、空に浮かんでいる大陸にある都市のことである。
地上との距離は、高価な望遠鏡でやっと観測できる程であり、地上の人が気づくことはまずない。
星船自体が、まだ開発されて間もない物であるため、最近になってようやくその名が広まり始めたというわけだ。
「……みんな、どうする？」
いきなりの提案に、当惑するトマスだったが、仲間達に声をかける。

「これといった目的地があったわけじゃねえけどなぁ……」
腕組みをしているガストンは、考えがまとまらないようだ。
エリーナも星船のことを知ったばかりなのもあってか、似たような様子だった。
「私は行ってみてもいいと思うわ」
そんな中リサだけは、はっきりと賛成意見を示した。
彼女に全員の視線が集中する。
魔術書と道具をしまいながら、彼女は言葉を続ける。
「フェーレなんて、行こうと思って行ける場所じゃないし、行く機会もそうそうないわ。……そうだとは思わない？」
トマスをじっと見て話す彼女が、何を言いたいのかすぐに分かった。
確かな手がかりがない今の状態では、どこへ行こうとある意味においては同じことである。　であるならば、行ける機会の限られた場所へ行ってみるというのは、確かに一つの選択肢ではある。
「そうだね。リサの言う通りかもしれない」
トマスはチラッと、ガストンとエリーナの方を見た。
「決まりだな」

「みなさんがそう決めたのなら、私は構いません」
二人はすぐに察したようで、真面目な表情でうなずいた。
「そんなに真面目な顔しなくても、フェーレは怖い所じゃないよー？　地上の街となんにも変わらないから、安心してくれたまえ」
興味津々な顔で成り行きを見守っていたドロシーだったが、自分の望む結果になって満足したようだった。

・星船

食堂を後にしたトマス達は、ドロシーの案内で街はずれまでやってくる。
そこには大きな星船が着陸していた。
外からの見た目は、普通の船とそこまで変わらないが、陸の上に船があるのは、慣れないうちは違和感を感じるかもしれない。
普通の船と違い、人の出入りするところだけ、外板がぽっかりと開いていた。
出入口のすぐそばで、青年が羊皮紙を片手に積荷の確認をしている。
トマス達が近づいていくと、彼が顔を上げた。
彼はくしゃくしゃの髪に、腕まくりしたシャツと長ズボンというラフな格好で、腰にはツールベルトがあった。
「おや、トマスさん。お久しぶりですね」
「久しぶり。元気そうですね」
「ぼちぼちやってますよ」
彼はドロシーの方に顔を向けると、疲れた様子を見せる。

「船長、人だかりの相手と積荷の積み降ろしを人に押し付けて、一体何やってんですか」

「トマス君のポーションを飲んでた！」

「はぁ……すいませんね、ウチの船長が迷惑かけたみたいで。代金十倍ぐらいふんだくっちゃって構いませんから」

「失礼だな君は！　ちゃんとお金は払ったとも！」

「どーせ返事も聞かずに、勝手に飲んだんじゃないんですか？」

「ピンポーン！　正解！」

彼はトマスとドロシー以外の仲間達に顔を向ける。

ぼぉっとしてるように見えるが、これでも彼にとっては真面目な表情である。

「初めての方もいるようですが、いつまでたっても船長が紹介してくれないので、自分から言わせてもらいますね。俺はカルノ・トゥランテって言います。船長の下で雑務やら何やら助手みたいなことやってます。元々は盗賊なんですけどね」

盗賊とはいっても、魔術師ギルドで登録するときの職業名であって、野盗の類ではない。

リサ達の方も、それぞれ自己紹介を済ませる。

「フフッ、魔術師ギルドで捨てられたネコみたいになってたから、私が拾ってあげたのだ！」
「はぁ……こんなことになるなら、付いていかなきゃよかったですかねぇ……」
彼はため息と共に、頭をポリポリとかいた。
「それで船長、今度はどんな悪だくみを思いついたんです？」
「トマス君といい、君といい失礼だなぁ。私はただ面白そうなことをしただけなのに。彼らを星船に乗せてあげようと思ってね」
「……またですか。どうせフェーレまで連れてって『どうだい、私の星船はすごいだろう！』とかやりたいだけでしょうが……」
「むぅ……最近は君もすっかりツレなくなってしまったな。私は悲しいよ」
「俺は初対面からこうでしたけど……王都のお偉いさん方に怒られても知りませんよ」
「私が許されてるのは積荷の運搬だけだがね。つまり、彼らは喋る荷物というわけだね！」
「ただのヘリクツですね」
二人にとってはよくあることのようで、言葉の割には深刻な雰囲気はない。

「あの、本当に良かったんですか？」
エリーナが遠慮がちに尋ねる。
「星船の権限は王都が握ってますが、物資の輸送も重要な国交の一つですからね。自分達が苦労せずに動かせる船長の星船って、ある意味では貴重なものなんですよ」
ドロシーは気に入った人しか星船に乗せる気はないらしく、特に大きな問題にはなっていないらしい。
「それじゃ、積荷もこれで最後なんで、さっさと運んでしまいますね」
カルノは肩を軽く回した。
「では私の星船に案内しようじゃないか！」
ドロシーがウキウキした様子で船内に入っていく。
トマス達もそれに続いた。
船底の部分には、所狭しと積荷が運び込まれている。
生活雑貨から、魔術書らしきものまで、その内容は実に様々だ。
積荷の間を縫うようにして階段へとたどり着くと、上へと登っていく。
ほんのかすかだが、空気の流れるような音が聞こえてくる。
いくつかの部屋を通り過ぎた後、彼女が一つの部屋へと入っていく。

「うぉ……こりゃ、すげぇな……」
ガストンが驚いた声を上げた。
「フフン、ここが星船の操舵室というわけさ！」
その部屋は、床、壁、天井に至るまで、びっしりとスクロールで埋め尽くされていた。
いくつものスクロールが折り重なり、複雑な模様を描きながら、部屋の真ん中に集約されている。
真ん中には、普通の船と同じような舵輪が設置されており、その周囲には八つの方角それぞれ一本ずつと、真ん中に細くて長い、計九本の魔術によるトーチが設置されていた。
今は着陸しているからなのか、どのトーチにも明かりは点いていない。
「中には初めて入ったけど、これはすごいね」
周囲を埋め尽くすスクロールに、トマスは圧倒される。
エリーナは声も出ないのか、ただただ、スクロールを眺めている。
「そうだろう、そうだろう。まずはコレを見て驚いてもらわないとね。星船からの挨拶代わりってやつさ」

ドロシーはそれぞれの反応に満足したのか、腕組みをしながらうなずいていた。
「船長、積み込み終わったんで、離陸してもいいですかね？」
後ろからカルノがやってきて、彼女に尋ねる。
「ちょうどいいや。このまま見てもらおうじゃないか」
ドロシーが楽しそうな顔で快諾する。
見世物じゃないんですけどねぇ……とカルノが言いながら、舵輪を握る。
ガコン、と音がして、彼が舵輪を手前へと少し引いた。
どうやら二段構造になっているらしい。
慣れた手つきで舵輪を右へ回すと、真ん中の細長いトーチの根元が、ほんのりと光り始める。
それに合わせるように、船外で風の音が聞こえ始めてくる。
彼がゆっくりと舵輪を回し続けていると、やがて身体が宙に浮いたような感覚がしてくる。
それと同時にトーチの光が力強いものになり、ゆっくりではあるが、上に登り始める。
「本当に飛ぶんですねぇ……」

エリーナが夢でも見ているような様子で言った。
「なぁ、思ったんだが、こんな何も見えねえ部屋の中で動かしても大丈夫なのか？」
操舵室の様子に圧倒されていたトマスも、ガストンの言葉にふと気づいた。
部屋には窓らしいものがなく、外の様子は伺えないのである。
「不安になる気持ちは分かるがね。スクロールを張る場所は少しでも欲しいし、空に障害物があるわけでもなし。こっちなら、大雨にずぶ濡れにならずに済むだろう？」
よくある質問なのか、ドロシーが案内嬢のように、すらすらと答える。
「周りの様子を見ながら操縦するときは、デッキにある方を使いますが、動力室に近いこっちの方がパワーは出るんで、状況に応じて使い分けているんです」
カルノが補足説明を加える。
「……見事な魔術陣の組み合わせだわ。かなりの腕利きが作ったものなのね」
星船が動き始めてから、縦横無尽に明滅するスクロールを見て、リサがつぶやいた。
「やっぱり、リサ君はそっちかね。一人だけ静かだったから、つまらないなあとは思っていたんだ」

「……それで？　この星船の動力源は何なのかしら？　まさか魔術鉱石を湯水のように使っているわけでもないのでしょう？」
「あはっ、やっぱそこが気になる？　少し動かすだけなら、それでもいけるらしいけどね」
ドロシーは待ってましたと言わんばかりに、にやぁっと笑った。
魔術鉱石とは魔力を含んだ石のことで、高価な武具に使われていると、トマスも聞いたことがあった。
ドロシーはリサの質問には答えずに、クスクスと笑いながら部屋を出ていく。
トマス達を連れて、別の部屋へと移動する。
ある部屋の前にたどり着いたドロシーは、クイクイとまるで対戦相手を挑発するかのように、リサを招き寄せる。
リサを先頭に部屋の中に入っていく。
部屋の中は操舵室と同じように、スクロールで埋め尽くされていた。
操舵室との違いは、部屋の中央に何かが安置されていることだった。
リサが部屋の中央に近づいていった。
「――っ！？」

顔を近づけると、彼女は驚いたのか、大きく肩が跳ねた。
「こ、これってっ――」
ばっとドロシーに顔を向ける。
「ふふふ、いい反応するねぇ。大量の物資を積み込んだ星船がどうして浮くのか、理解できたかね？」
「そんなにすごいものなの？」
トマス達も興味津々で近づいた。
「すごいもなにも……これ、マナクリスタルじゃない！」
「なんだって！」
ガストンが慌てた様子でリサの隣に立った。
トマスとエリーナもそれに続く。
「正確にはカケラだがね。丸々一個というわけでもなし、そんなに大したものでもないさ」
安置されていたのは、小さな宝石のようなものだった。
大きさは、トマスの手の平に乗せれる小石ぐらいに見える。
淡い緑色の燐光を発しながら、その光がスクロールへと流れていく。

「マジかよ……本物なんて初めて見たぜ……」
ガストンが、言葉を絞り出すようにしてつぶやいた。
「それは、私の大じい様が見つけてきたものなのさ。そんな小さな石ころ程度の大きさじゃあ、大した使い道はないと思うがね。でも曲がりなりにもマナクリスタルなんだし、せっかくだから有効活用しようと思ったわけさ」
「……道理で王都が介入したがるわけだわ。星船もそうだけど、こんなもの、個人の手にあっていいものじゃないわ」
マナクリスタルとは、地中深くに埋まっているとされる、膨大な魔力を秘めた鉱物のことで、滅多にお目にかかれるものではない。
大昔から存在すると言われているが、秘めている魔力の総量は現在でも計測不能であり、一説には大気中のマナを吸収して、魔力にしているのではないかと言われている。
国に一個存在するだけで、周辺諸国の力関係さえも変えかねない程のものである。
そんな一抱え程もある鉱物のマナクリスタルだが、それだけの影響力があるにも関わらず、有効活用できる方法は意外と少ない。
理由は単純明快で、秘めている魔力が膨大過ぎて、人間の手に負えないのだ。

魔術に特化した種族であるエルフ族ですら、首を横に振るしかないという。
だがそれでも無尽蔵の魔力を秘めていることに変わりはなく、自然放出される魔力を汲み取って有効活用すれば、大きな利益になると言われている。
「この部屋と操舵室のスクロールで、マナクリスタルを制御してるのか？」
ガストンが尋ねる。
「まさか。カケラとはいえ、マナクリスタルだよ？　制御なんてそんなご大層なものじゃあない」
「星船はマナクリスタルのカケラから放出された魔力を、そのまま風の魔術に変換しているだけなんです」
後ろからやってきたカルノが付け加える。
「着陸しているときなんか、なーんにもしてなくても魔力は垂れ流しっぱなしなのさ。もったいない話だねぇ」
ドロシーは口ではそう言うものの、あまり気にしていないようだ。
彼女にとっては星船が動きさえすれば、それ以外のことはどうでもいいのだろう。
「空を飛ぶ魔術ってあるの？」
トマスはリサの方を見た。

「……あるわけないでしょう、そんなもの。この星船が浮いているのは、風の魔術をずっと使い続けているからよ。それこそ無尽蔵の魔力を持つマナクリスタルでもないと不可能だわ。それと、マナクリスタルは、それぞれから引き出せる力が決まっているの」

つまり、この星船にあるカケラからは、風の魔術にしか転用できないということらしい。

「大じい様なんか、暑いときに役に立ったとか言ってたよ？」

「……なんてことに使ってるのよ」

ドロシーがいたずらっぽい顔でペロッと舌を出すと、リサは顔に手を当てて嘆いていた。

「マナクリスタル……ですか……私、どこかで聞いたことあるような……」

エリーナが、マナクリスタルのカケラを、じっと見つめながらつぶやいた。

淡い燐光に照らされた彼女の横顔は、どこか神々しさを漂わせていた。

「マナクリスタルの伝説は、あちこちにあるからね。エリーナ君に聞き覚えがあっても不思議ではないさ」

ドロシーが肩を竦める。

マナクリスタルのカケラは、星船の動力源であると共に、風の魔術で結界を張って船体を防護するのにも使っているらしい。
「動力の足しになるかと思って、帆を上空で使ってみたんだが、穴だらけになってしまってね。船体はバラバラになりそうだったし、危うく大陸の外にある、ムツカグラまで吹き飛ばされるところだったよ。ふふふっ」
「いや、それは笑えねえだろ」
ガストンが呆れた顔をする。
「ありゃあマジでヤバかったです。死ぬかと思いましたから」
「なぁに、冒険にスリルは付きものさ」
とはいえ、離着陸の微調整として使ったりと、全く出番がないわけではないらしい。
マナクリスタルに関する話が落ち着いたところで、トマス達は動力室を後にする。
「さて、それではカルノ君、晩御飯の準備は任せたよ」
「……また俺ですか。たまには自分でやってくださいよ」
部屋を出て早々、ドロシーがそんなことを言ってのける。
「星船の操縦はいいんですか？」

エリーナが不思議そうな顔をする。
「星船の操縦って、そんなに難しいものじゃないんですよ。今は離陸した直後ですし、大雑把な方角だけ示しておけば大丈夫なんです」
「それに星船は、地上や陸から離れれば離れる程、速度が落ちるんだ。フェーレまで着くのに丸一日かかるんだなぁこれが」
「へぇ……マナクリスタルも万能じゃないのね」
リサが意外そうな表情を浮かべる。
「そりゃそうさ。そうじゃなけりゃ、私の手の中に納まったりしないさ。ちなみに私の星船は、武装の搭載は許可されてないんだ。私が反乱など企てようものなら、ノロノロ運航の星船なんか、大砲一発で撃墜されてしまうのだよ」
「え、武器なんかもダメなのか？」
「冒険者がするような、個人の武装は構いませんけどね。さすがにその辺りは、王都のチェックも厳しいです」
「そういうことだから、何かあったときは、諸君に任せるよ。私は土の魔術しか使えないんだ。空にいることが多いのに、これは皮肉でしかないねぇ……アハハッ、こりゃ愉快だ」

ドロシーは何が面白いのか、自分の言ったことにウケている。
そして、いたずらっぽい顔でチラリとトマスの方を見やった。
「まぁ……トマス君も似たようなものだよね」
「……見てたの？」
トマスは苦笑いを浮かべる。
「リサ君が見事な魔術を披露しているのに、トマス君は……ぷぷっ、そよ風も起こらなかったねぇ……」
「船長が飛び出していったのは、それを見たからですか。なんで慌てて走っていったのか、ずっと不思議だったんですよ」
カルノは納得した様子で、ため息をついた。

・空中都市フェーレ

ドロシーの案内で、次の日にデッキへと移動したトマス達が見たのは、おとぎ話に出てきそうな光景だった。

どこを見渡しても、雲、雲、雲。

視界に広がるのは、果てまで続く真っ白な世界だった。

雲海のすき間にひっそりと収まるように、その都市はあった。

それは文字通り、空に浮いた大陸である。

その都市の街並みは、大理石のように真っ白なものが多い。

空中に浮いているから、他国からの侵略を受けるようなこともないらしく、古い立派な建物も所々に見受けられる。

土地が限られているという事情からなのか、縦に細長い建物がいくつも建っていた。

星船が着陸したときの様子は、思っていたよりも普通だった。

てっきり街の人々が、大人数で殺到してくるのかと思ったが、すっかり慣れてしまっているらしく、あ、また来たのか、というような感じだった。

まるで駅馬車のような反応である。

「本当に地上と変わらないんだね」

「ふふっ、何だいその反応は。英雄のように出迎えてほしかったのかね？」

トマスが正直な感想を口にすると、ドロシーは、してやったりといった感じで、ニヤニヤしていた。

彼女は皮のカバンをプラプラと手にしている。

トマス達は、彼女に案内してもらいながら、フェーレの街中を歩いている。

最初は積荷を下ろす作業を始めるのかと思ったが、まずは責任者に挨拶をするのが、ここでの取り決めらしい。

彼女が言っていた通り、空に浮いているということ以外は、至って普通の街だった。

街の人達が奇抜な格好をしていたり、自分達を奇異の目で見るようなこともない。

高い建物が比較的多いのは珍しいものの、他の街との大きな違いは、それぐらいしかなかった。

「着いたよ。ここが目的地さ」
ドロシーが足を止めたのは、まるで神殿のような建物だった。

・あとがき

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。
体験版はいかがでしたでしょうか？
この後、彼らは大きな出来事に巻き込まれていくことになります。
なお、製品版には、さやかですが、おまけの短編も付いてます。
それでは製品版でお会いできることを願っております。
貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。

・長い時のなかで

高価な羊皮紙に、羽ペンがカリカリと走る音が小さく響いた。
ゆらゆらと机のランプが手元を柔らかく照らしている。
部屋の中で自分以外の物音はなく、静かなものだった。
キリのいいところで手を止めると、彼はふと窓に目を向けた。
既に日は落ちており、真っ暗だったが、かすかに雲が流れていくのが見える。
ここまでくるのに、本当に長かった。
彼が一息ついていると、部屋の外の廊下からトコトコと足音が聞こえてくる。
「もう、またこんな夜までやってる」
ドアを開けて開口一番、少女は呆れた顔で言った。
彼の元まで歩いてくると、木のカップを手渡してくる。
ほんのりと温かい。
「いつもすまないな」
「そう思ってるんなら、ありがとうって言ってほしいな」
少女がじいっと彼を見つめる。
「そうだったな。いつもありがとう」

「よろしい」
少女は満足したのか、エヘンと胸をはった。
温かいカップの中身をゆっくりと一口飲んだ彼は、それを机に置いた。
「長いことかかってしまったが、もうすぐだよ」
「ホント！？」
少女はその言葉を聞くや否や、目を輝かせて身を乗り出した。
「ああ、本当だよ。待たせてすまなかったな」
彼は愛おしそうに少女を抱き寄せる。
「もう……私、そんな子供じゃないよ」
口ではそう言っているが、少女の方も身を寄せてくる。
「寂しかったか？」
彼は壊れ物を扱うように、少女の髪をゆっくりとなでた。
「……ううん」
少女は、甘えるように頭を彼の胸に押し付ける。
返事が言葉通りの意味ではないことは、他ならぬ彼自身が一番よく知っている。
辺りは静かな空気に包まれていた。
このときの二人の心は、とても温かいものだった。

・新たなる出会い

トマス・オーネルは立ち上がると、背筋を伸ばして腰をトントンと叩いた。
柔らかな日差しが、くすんだ金髪に降り注いでおり、今日も外はいい天気だった。
心地いい風が、くたびれた旅装を揺らしていく。
「こんなもので良かったかしら？」
「ありがとう。これだけあれば十分だよ」
藍色のとんがり帽子に黒いローブ姿の少女、リサ・ワーズノースが歩み寄ってきた。
濡れ羽色の髪を長く伸ばしている彼女は、一流の魔術師にして冒険者である。
トマスはもう一人の少女の方を向いた。
「そっちはどうだい？」
「今持っていきますね」
「うわ、いっぱい採れたねぇ」
「えへへ。摘み始めたら、なんだか楽しくなってきちゃいました」
エリーナ・アステルは楽しそうに茶色の瞳を細めた。
持ってきた薬草の量は、二人の倍ぐらいありそうだった。
彼女は頭を赤いハンカチで包み、肩より少し伸ばした茶色の髪は、耳元の一房だけを三

つ編みにしていて、黄色いブラウスと、ハンカチと同じ色のスカートの上から、エプロンをしていた。

髪の間からは、ドワーフ族の証である、控えめに尖った耳が可愛らしくのぞいている。

「こういうのも、ドワーフ族ではよくあることなの？」

「さあ、どうなんでしょうか？　土を触るのは楽しかったですけどね」

不思議に思ったトマスは尋ねてみたが、ドワーフ族の能力ということではないらしい。

トマス達はエリーナの故郷であるスタラントの村を出発し、王都を目指していた。

いくつかの街や村を通り過ぎて、クネスの街に到着したその翌朝、薬草を摘みに街はずれにやってきたのである。

スタラントの村で使ってしまったポーションを補充するのと、この先の旅で必要になるであろうお金を、薬売りであるトマスが稼ぐためでもあった。

地面に置いてある皮のリュックに薬草をしまい終えると、リサが口を開いた。

「さて、薬草も摘んだことだし、もう一度やってみるわよ」

彼女はそう言って、二人から少し距離をとった。

深い海のような色をしている切れ長の瞳をそっと閉じると、同じ色の宝石がついた杖を草原に向けてまっすぐに構える。

彼女が魔術の詠唱を始めると、途中から折れているとんがり帽子とローブが風にはためき始める。

魔術は大気中にあるマナと、自分の魔力を混ぜ合わせることで使うことができるのだ。

詠唱が終わって杖を一振りすると、強い風が巻き起こった。
草原が真っ二つに分かれる。
彼女はトマスに振り返った。
「ほら、教えた通りにやってみなさい」
「よし、やってみるよ」
「トマスさん、頑張ってください」
エリーナの応援を背に受けながら、トマスは身構える。
「風よ……大いなる渦の形となりて、我が敵を引き裂け！ウインドスラッシャー！」
詠唱が終わると同時に、強い風が巻き起こった。
……街はずれの草原は、少し時が止まったかのようだった。
リサと全く同じ詠唱をして、魔力も確かに練り上げたはずなのに、何も起こらない。
彼女は深々とため息をついた。
「まぁ……予想はしてたけどね」
「おかしいなぁ、ちゃんとできたと思ったんだけどな……」
「全くもって分からないね。初級のウインドはすぐ使えるようになったのに」
「これ、結構難しい魔術なの？」
「全然。見習いの魔術師でも使える子、普通にいるわよ」
「うむむ……」
見習いの魔術師と比べられて納得いかない表情を浮かべるトマスは、手の平をじいっと

見つめたりしてみるが、それで使えるようになるはずもない。
魔術というのは、向き不向きの素質が人によってある程度決まっている。
苦手な魔術に関しては、全く使えない者も珍しくない。
初級の魔術は使えたのだから、練習を続ければ使える可能性はあるのかもしれないが、今のところ芽が出る様子はなかった。
「じゃあ、氷の魔術は？」
「そっちはもっと期待できないわね。大人しくスクロールに頼ってなさい」
「あ、そう……」
トマスはがくりと首をたれた。
スクロールというのは、魔術陣が書き込まれた紙のことで、魔力を込めるだけで使える便利なもののことである。
ただし、大抵は一度きりの使い捨てで、何度も使えるものは値が張るのである。
「焦ったって仕方ありませんよ。長いこと薬草摘んでいましたし、お昼にしませんか？」
エリーナが慰めるように提案する。
「そうだね。一旦クネスの街まで引き上げようか」
三人が街に引き返そうとしたそのときだった。
エリーナが控えめに尖った耳をピクリと震わせると、草原の奥にある森の方に顔を向ける。
「何かがこちらに向かってきます！」

トマスとリサは、その言葉に気を引き締める。
ガサッガサガサッ
森の中から飛び出してきたのは、草原などでよく見かけるモンスター、グラスゴブリンだった。
普通のゴブリンと比べて、やや明るい緑色をしている。
折れた剣や粗末なこん棒など、不ぞろいの武器を手に、十体程が群れで襲ってきた。
「エリーナ！　頼むよ！」
「はいっ」
エリーナは腰から護身用の小さな投げ斧を引き抜くと、こちらに迫ってくるグラスゴブリン達の足元に狙いを定めて、斧を投げつける。
ヒュンッと風を切る音を響かせて地面に衝突した斧は、大量の土を派手にめくり上げて、グラスゴブリン達に浴びせかけた。
ドワーフ族であるエリーナは、人間であるトマス達よりも優れた腕の力を持っている。
威嚇ではあるものの、その威力は土の魔術に匹敵する程である。
グラスゴブリン達の中に慌てふためく者が出始める。
「炎よ……獣の形となりて、我が敵を焼き尽くせ！　フレイムビースト！」
リサがそのスキをついて炎の魔術を放った。
生み出された炎は四本足のトラのような形になって、グラスゴブリンに突っ込んでいく。
魔術師は自分の衣服に特殊な魔術を施すことで、身体だけではなく、身に着けた衣服か

らもマナを取り込むことができるのだ。
丈の長いローブやとんがり帽子、髪を長く伸ばしているのもそのためだ。
「ギャアアァァァ！！」
グラスゴブリン達が次々と焼かれていくが、広い場所で戦っているせいか、運よく避けることができた者もいたようだ。
トマスは腰からやや短めのブロードソードを引き抜くと、生き残ったグラスゴブリン達に斬りかかる。
エリーナとリサの手によって、群れは既に壊滅しかかっていた。
倒れたグラスゴブリンの間を縫うように、走りながらトマスが剣を振るっていくと、生き残っていた者達も後を追うようにバタバタと倒れていった。
生き残りがいないことを確認して一息ついたトマスは、エリーナの方を振り返った。
「エリーナ、いつもありがとう」
「いえいえ。私も一緒に旅をしてるんですから、できることをやらないと」
「そんなに気負わなくても大丈夫よ」
斧を回収しているエリーナを眺めながら、トマスはふと思いついたことを尋ねる。
「エリーナ、他の斧は投げられるのかい？」
護身用の斧は、柄の長いとんかち程度の大きさである。
「村で練習してたときに、いくつか試したことはありましたから、一挺か二挺ぐらいなら他の斧でも投げられると思いますよ」

「へぇ……そうなんだ」
ドワーフの村では十歳になる頃には、親から練習させられる話は前に聞いたことがあった。
トマスは森の方へと視線を向ける。
「……何であんな群れが飛び出してきたんだろう」
「確かにそこは気になるところね」
あれだけの群れが一度に出てくることは、滅多にあることではない。
エリーナが感じた様子からしても、こちらを察知して……という風でもなさそうである。
一体何が起こっているのかと三人が考えていたときだった。
エリーナがまたもや振り向くのと、何かが飛び出してくるのは同時だった。
「この野郎！　大人しく待ちやがれってんだ！　……お、おぉ？」
飛び出してきた何者かは、地面に倒れているグラスゴブリン達に驚いていた。

・再会

「わーはっはっは。まさかグラスゴブリン共を追いかけているうちに、お前に出会えるとはな！　ほんと、ビックリしたぞ」
「分かったから離してってば。ちょっと痛いんだけど」
赤銅色の髪の彼は大笑いすると、呆れているトマスの肩をぐいっと引き寄せた。
あれからトマス達は街はずれの草原を引き返して、クネスの街に戻ってきた。
お昼がまだだったので、そのまま彼と一緒に食堂へと向かうことになったのだ。
「それにしてもお前、一人で旅してるって聞いてたんだが、いつの間にかパーティなんて組んじまって、それも綺麗な魔術師の子に、ドワーフ族の可愛い女の子ときたもんだ。お前も隅に置けねえなぁ？」
彼はトマスにニヤニヤした笑みを向ける。
「あのねぇ……僕がどうして旅に出たか、お前は知ってるでしょーが」
「まぁな」
彼はトマスの呆れた顔に満足したのか、肩から手を離すと、笑みを浮かべたままリサとエリーナの方に顔を向ける。
「魔術師さんの方はグラスゴブリンのやられようから、相当な腕前なのは間違いない。ど

う考えても、トマスと釣り合うようには見えないんだよな。んで、そっちのドワーフさんは冒険者って感じでもない。村にいるごく普通の女の子のように俺は感じた。……そんな二人がこいつと一緒にいるってことは……」

今まで成り行きに任せていたリサだったが、彼が言い終わる前に、トマスに真剣な表情を向ける。

「ふっ……そう怖い顔しなさんな。そもそも俺がここまで来たのは、こいつの手助けをするつもりだったからなんだよ。つまり二人は……シズク絡みってことだよな？」

最後だけは彼の声が小さくなった。

イデアのシズク。

それは死んだトマスの父が探してほしいと、トマスに託したものだった。

それが一体何なのかは分からない。

だが、今では大切な願いだったのではないかと思っている。

「……じゃあ、あなたもそうなの？」

リサは真剣な表情を崩さないまま、彼に尋ねる。

「正直なところ、半々ってところだな。俺のオヤジもトマスのオヤジさん達の仲間だったらしくて、一緒に旅してたらしいんだ。だが、身体をダメにしちまったらしくてな。途中でリタイアってわけさ」

「でも、今も生きていらっしゃるなら、詳しい話が聞けるんじゃないんですか？」

エリーナが至極当然な意見を口にする。

「それは難しい話なんだよ、エリーナ」
トマスは苦笑いを浮かべた。
「ど、どうしてですか？」
「トマスのオヤジさん達が死んじまったってのもあるとは思うんだが、オヤジの奴、そのことになると急にダンマリになっちまうんだ。俺はともかく、トマスから聞いても話さない辺り、よっぽどのことなんだろうな」
「そうなんですか……」
「ま、だからって何もしないわけにもいかないしな」
彼はそこで一旦言葉を切った。
リサとエリーナに向きなおる。
「遅くなったが、俺はガストン・ベルナール。この春に王都の騎士養成学校を卒業した自由騎士にして、トマスの小さい頃からのダチってやつさ」
そう言って彼は、二人に自由騎士の証である、小さな赤いメダルを見せる。
彼は赤銅色の髪を短く刈り上げていて、全身を覆うプレートメイルと腰にはバスタードソードという出で立ちだった。
イスにはバックラーとロングスピアが立てかけられている。
少女達も自己紹介をする。
「私はエリーナ・アステルって言います。バックパッカーを担当させてもらってます」
バックパッカーとは、荷運び兼パーティー支援役のことである。

エリーナの隣には、トマスのものより二回りは大きい皮のリュックがあった。
「見ての通り、魔術師をやってるわ。……名前はリサ・ワーズノース」
「ん？　ワーズノースってのは……」
「あーはいはい、言いたいことは分かったから」
「ははっ、相当苦労してるみたいだな。これ以上は何も言わねえよ」
「ええ。そうしてくれると助かるわ」
リサはこのやり取りを何度も経験しているのか、うんざりした顔をする。
「この春に卒業……ね、そういえば、もうそんな時期だったわね。……なるほど、あなたがトマスの言っていた彼だったってわけね」
「お？　何だ何だ、俺のこと知ってたのか？」
「二人には、大体のことは話してあるからね」
「そりゃそうか。こんな突拍子もない話、正直に話さないと信じてくれないわな」
「王都の騎士なんてすごいんですね」
その言葉に、ガストンは苦笑いを浮かべる。
「エリーナちゃんにそう言ってもらえるのは嬉しいんだが、俺は平民だからなぁ……騎士を目指す貴族様達の練習相手でしかないのさ」
「ふん、大体騎士なんて、なろうと思ってなれるようなものでもないのよ。それなのに騎士養成学校だなんて、貴族のプライド丸出しみたいで恥ずかしくないのかしら。素直に練兵所とでも言えばいいんだわ」

「ミもフタもねえ言い方だなぁ……まあ、俺もその意見には賛成だけどよ」
騎士養成学校は、誰でも入れるものの、卒業して正式な騎士になれるのは貴族だけだ。平民出身の者は、貴族と仲良くなって従騎士にしてもらったり、王都が斡旋している兵士になるなどの道がある。
そしてもう一つ、王都が用意した道が自由騎士である。
要は冒険者なのだが、他の者との違いは授与される小さな赤いメダルにある。
これを持つ限り、自由騎士は魔術師ギルドで優遇してもらえるのだ。
魔術師ギルドは、冒険者の数が減ってきている今では、実質冒険者ギルドのようなものである。
「貴族の方と一緒の学校ですか……やっぱり卒業するときは、お城に呼ばれたりするんですか？」
「まさか。俺達なんて、ただだっ広い広場に集められて、『諸君、この王都のために立ち上がろうではないか』とか何とか、ありがたい話を聞かされて、それでおしまいさ。貴族の奴らは今頃叙任式でもやってるんだろうけどな」
話が一段落したところで、頼んでいた昼食が運ばれてきた。
ガストンが明るい性格なのもあってか、二人とはすぐに馴染めたようで、トマスは一安心だった。
楽しい雰囲気のまま昼食が終わると、店員が食器を回収しながら、飲み物のお代わりを尋ねてくる。

既にお昼も過ぎていたからか、客はトマス達だけになっていた。
「やっとトマスと再会できたんだ。エールといきたいところだが、果実酒にしとくか」
「僕は果実水で」
「私も果実水にしようかしら。エリーナはどうするの？」
「私も果実……水でお願いします」
「分かったわ。すみません、果実酒と果実水、二つずつでお願いします」
その瞬間、エリーナの耳がピクッと動いた。
「リ、リサさんっ」
「あら、何かしら？」
奥へと下がる店員を見送りつつ、リサが涼しい顔で返事をする。
「私、果実水って言いましたよねっ」
「そうだったかしら？　果実酒も果実水も似てるから、気をつけないといけなかったわね。ごめんなさい」
「エリーナ、遠慮しなくていいよ」
「むー」
エリーナが顔を赤くしながら、リサをじろーっと睨むが、リサはどこ吹く風だ。
「ぷっ、お前ら見てると退屈しねえな」
ガストンが吹き出した。
一緒に旅を始めた頃は、実はトマスも気づかなかったことだった。

よくよく考えてみれば、ドワーフ族はお酒が好きなことぐらい当たり前のことなのだが、エリーナはトマスとリサに遠慮してか、自分からお酒を頼むことは全くなかったのだ。

しかし、毎日顔を合わせていると、食事をするたびに、彼女がほんの少しではあるが、妙に物足りなさそうにしていることに、段々と気づいてくるのである。

二人で一緒に何度か尋ねると、彼女は顔を真っ赤にしながら、ようやく答えてくれたのだった。

それでも今みたいに、半ば強引に頼んだりして、やっと口にする程度で、普段は滅多に飲まないのである。

彼女なりに、この旅を真剣に考えているのだと、トマスには分かったが、時には息抜きも必要だ。

リサがこうして時々頼むのは、エリーナを気遣っているからなのだろう。

「さて、と」

リサは懐から書物といくつかの道具を取り出すと、羽ペンで何か書き込み始める。

「それは何だい？」

「魔術書よ。簡単に言えば、自分専用の何度も使えるスクロールってところかしら。一人で旅してたときは必要だとは思わなかったけど、誰かさんといると、いつ危険な目に合うか分からないからね」

「そ、そっか。あはは……」

リサが恨めしそうにトマスを見ると、トマスは苦笑いを浮かべるしかない。

「そういや、二人とどうやって知り合ったのか、聞いてなかったが、その様子だと何かあったみたいだな？　聞かせてくれよ」
「ん、まぁ、色々ね」
「……色々なんてものじゃないでしょう？」
「私はトマスさんに感謝していますよ」
リサが、あなたから話しなさいよと言わんばかりに、含みのある言い方をする。
その一方で、エリーナは優しく微笑んでいた。
頼んだ飲み物が運ばれてきたのをきっかけに、トマスはガストンに話すことにした。
トマス達が知り合うことになったのは、エリーナの故郷、ドワーフの村のスタラントでの出来事だった。
そこでトマスは困っていたエリーナと出会い、宿屋の酒場でリサと出会うことになる。
火竜の洞窟へ探検に出かけた三人は、最深部で石碑と封印された宝石を発見するも、採掘団の護衛の手によって封印は解かれてしまい、宝石の中から出てきたのは、巨大なドラゴンだった。
危うく村が壊滅しそうになるものの、リサの封印魔術で何とか危機を脱したのだった。
その後は、互いの家族が仲間であったことが分かり、今に至るというわけだ。
トマスの懐には、リサの魔術でドラゴンを封印した宝石――炎のシズクがある。
「ドラゴンなんてすげえな……どうやら、一筋縄ではいかなさそうだな」
ガストンは、真剣な表情で腕組みをしながら話を聞いていた。

「……まぁ、そんなことがあって、手がかりらしいものは、今は全くないんだ。だから一度王都に戻って情報を集めてみようと思うんだ」
「そうだな。今のところはそれが無難かもしれないな」
ガストンも納得して話がまとまりかけたときだった。
――ゴオオォォ……ォォ……ォォ……ン……
食堂の外から、大気を振るわせるような音が響いてきた。
街の人達が音のする場所へと、駆けていくような足音も聞こえてくる。
「あら、珍しいわね。こんなところに星船が着陸するなんて」
「え、星船？」
トマスはその言葉を聞いた途端、ギクリとする。
「あ、あのさぁ、もうご飯も済んだことだし、そろそろ宿の方へ行かないかい？」
足元に置いてあった皮のリュックを、トマスは慌てて背負い始める。
「え？　まだ昼をちょっと過ぎたぐらいだろ？　早くねえか？」
いきなりの提案に、ガストンが目をパチクリとしている。
「ほ、ほらっ、夜になって泊るところがなくなっても困るじゃないか。そうでしょ？　何事も準備はちゃんとしておくべき――」
「いや素晴らしい！　全くもってその通りだね！」
突如そんな声が後ろから聞こえてきたかと思うと、トマスは皮のリュックをバシッと叩かれた。

突然の出来事にびっくりしたトマスだったが、やがて深いため息をついた。
食堂の店員も何事かと、こちらを見ている。
客がトマス達だけになっていたのは幸いだった。
「いきなりですまないが、失礼するよ」
「あ、ちょっと」
声の主である少女は、トマスの皮のリュックに手を突っ込んだ。
慣れた手つきでポーションを取り出すと、勝手に栓を開けてグビグビと飲み始めてしまった。
年若い娘が優雅な仕草で飲んでいるので、様になっているように見えるが、やっていることは酒場の飲んだくれと同じである。
「ふぅ……トマス君、随分と腕を上げたじゃないか。はいコレお代ね」
「ど、どうも……」
トマスの手には多過ぎる代金が乗せられていた。
いきなりの展開に、トマス以外の三人はポカンとしている。
「ほら、さっさと私をみんなに紹介したらどうだね？　仲間の方々が困ってしまっているじゃないか」
トマスは顔を手で覆うと、もう一度深いため息をついた。
「えーっと……この人は僕の知り合いの商人で、ドロシー・ウィッキンズって言うんだ。僕を見かけるたびに、こんなことしてる変な商人さんなんだよ」

「失礼だね君は！　トマス君の作るポーションは美味しいから仕方ないのだ。それに私は星船の船長なのだよ！」

彼女はビシッと指を立てて、ポーズを決めた。

レースのブラウスに、高価そうなシルクのロングスカート、と……ここだけを見れば貴族のお嬢様と言われても納得できそうな服装なのだが、被っているハンチング帽は日に焼けて色あせており、羽織っている皮の上着は、あちこち擦れている上に、隅の方は、ほつれたままになっていて、なんともちぐはぐな格好の少女だった。

初対面の人は判断に困るだろうなとトマスはいつも思う。

「へぇ……俺達とそう歳も変わらなさそうなのに、すげぇんだな」

そんな容姿に構わず、ガストンが素直な感想を言うと、彼女は満足したのか何度もうなずいた。

「うむうむ。実に素晴らしい反応だよ。素直でよろしい。……ところでトマス君、私と一生を共にする覚悟はできたかね？」

「一生をって……えぇっ」

何を想像したのか、エリーナが驚いた顔をする。

「エリーナ、あまり本気にしちゃダメだよ」

「こらこら、トマス君。そうあっさりとバラさないでくれたまえ。私がイケメン君好みなのは確かだがね。言っちゃあ何だが、トマス君は私の好みじゃないねぇ」

「……何でこんなところで着陸したのさ？」

「そりゃ君、今王都のお城では、騎士達の叙任式の真っ最中だからね。これ以上王都を騒がしくするなとのお達しなのさ」

どうやら王都の代わりとして、クネスの街を着陸先に選んだらしい。

「船って……海を渡る乗り物ですよね？」

山育ちのエリーナには、星船というのが、いまいちピンとこないようだ。

「チッチッチ、違うんだな。私の船はなんと、空を飛ぶのだよ！」

ドロシーが人差し指を左右に振ったかと思うと、大仰な仕草で両腕を広げた。

星船は、夜に船を下から見上げた人々が、まるで星々の中に浮いているように見えたことから、その名が付いたと言われている。

「はぁ……すごいんですねぇ……」

エリーナが感嘆の言葉を口にするが、どっちかというとドロシーの大袈裟な仕草に呑まれているようにも見える。

「フフフ……星船さえあれば、どこへでもビュンビュン行けるからねぇ」

ドロシーは星船の持ち主ではあるものの、形式的には王都の所有物であり、それを借り受けている契約になっているそうだ。

離着陸する場所も、逐一王都に報告する形になっており、言葉通りに自由に動かせるわけではないらしい。

だが、彼女にしてみれば、そんなものは些細なことなのだろう。

「よし、トマス君の顔を眺めるのにも飽きてきた頃だし、そろそろ本題に入ろうじゃない

か。ここで会ったのも何かの縁だ。君達、私の星船に乗る気はないかね？」
「……一体何を考えてるのさ」
トマスは呆れた顔をする。
「何、深い意味はないよ。ただ、その方が面白くなるのではないかと私は思うのだよ！」
「ごめん、真面目に聞いた僕が間違ってたよ」
「そんなにつまらない顔をしないでおくれ。まだとっておきのネタがあるんだ。今回の行き先はなんと、空中都市のフェーレなのだ！」
その言葉にガストンが目を見開いた。
「フェーレって……あのフェーレなのか？」
「アハハッ、面白いね君は。私もあちこち行った経験はあるが、地上にもフェーレという場所があるのかい？　そんな面白い情報があるなら、早く教えてくれたまえよ」
空中都市フェーレ。
それは文字通り、空に浮かんでいる大陸にある都市のことである。
地上との距離は、高価な望遠鏡でやっと観測できる程であり、地上の人が気づくことはまずない。
星船自体が、まだ開発されて間もない物であるため、最近になってようやくその名が広まり始めたというわけだ。
「……みんな、どうする？」
いきなりの提案に、当惑するトマスだったが、仲間達に声をかける。

「これといった目的地があったわけじゃねえけどなぁ……」
腕組みをしているガストンは、考えがまとまらないようだ。
エリーナも星船のことを知ったばかりなのもあってか、似たような様子だった。
「私は行ってみてもいいと思うわ」
そんな中リサだけは、はっきりと賛成意見を示した。
彼女に全員の視線が集中する。
魔術書と道具をしまいながら、彼女は言葉を続ける。
「フェーレなんて、行こうと思って行ける場所じゃないし、行く機会もそうそうないわ。……そうだとは思わない？」
トマスをじっと見て話す彼女が、何を言いたいのかすぐに分かった。
確かな手がかりがない今の状態では、どこへ行こうとある意味においては同じことである。　であるならば、行ける機会の限られた場所へ行ってみるというのは、確かに一つの選択肢ではある。
「そうだね。リサの言う通りかもしれない」
トマスはチラッと、ガストンとエリーナの方を見た。
「決まりだな」
「みなさんがそう決めたのなら、私は構いません」
二人はすぐに察したようで、真面目な表情でうなずいた。
「そんなに真面目な顔しなくても、フェーレは怖い所じゃないよー？　地上の街となーん

にも変わらないから、安心してくれたまえ」
興味津々な顔で成り行きを見守っていたドロシーだったが、自分の望む結果になって満足したようだった。

・星船

食堂を後にしたトマス達は、ドロシーの案内で街はずれまでやってくる。
そこには大きな星船が着陸していた。
外からの見た目は、普通の船とそこまで変わらないが、陸の上に船があるのは、慣れないうちは違和感を感じるかもしれない。
普通の船と違い、人の出入りするところだけ、外板がぽっかりと開いていた。
出入口のすぐそばで、青年が羊皮紙を片手に積荷の確認をしている。
トマス達が近づいていくと、彼が顔を上げた。
彼はくしゃくしゃの髪に、腕まくりしたシャツと長ズボンというラフな格好で、腰にはツールベルトがあった。
「おや、トマスさん。お久しぶりですね」
「久しぶり。元気そうですね」
「ぼちぼちやってますよ」
彼はドロシーの方に顔を向けると、疲れた様子を見せる。
「船長、人だかりの相手と積荷の積み降ろしを人に押し付けて、一体何やってんですか」
「トマス君のポーションを飲んでた！」

「はぁ……すいませんね、ウチの船長が迷惑かけたみたいで。代金十倍ぐらいふんだくっちゃって構いませんから」
「失礼だな君は！　ちゃんとお金は払ったとも！」
「どーせ返事も聞かずに、勝手に飲んだんじゃないんですか？」
「ピンポーン！　正解！」
彼はトマスとドロシー以外の仲間達に顔を向ける。
ぼぉっとしてるように見えるが、これでも彼にとっては真面目な表情である。
「初めての方もいるようですが、いつまでたっても船長が紹介してくれないので、自分から言わせてもらいますね。俺はカルノ・トゥランテって言います。船長の下で雑務やら何やら助手みたいなことやってます。元々は盗賊なんですけどね」
盗賊とはいっても、魔術師ギルドで登録するときの職業名であって、野盗の類ではない。
リサ達の方も、それぞれ自己紹介を済ませる。
「フフッ、魔術師ギルドで捨てられたネコみたいになってたから、私が拾ってあげたのだ！」
「はぁ……こんなことになるなら、付いていかなきゃよかったですかねぇ……」
彼はため息と共に、頭をポリポリとかいた。
「それで船長、今度はどんな悪だくみを思いついたんです？」
「トマス君といい、君といい失礼だなぁ。私はただ面白そうなことをしただけなのに。彼らを星船に乗せてあげようと思ってね」

「……またですか。どうせフェーレまで連れてって『どうだい、私の星船はすごいだろう！』とかやりたいだけでしょうが……」
「むぅ……最近は君もすっかりツレなくなってしまったな。私は悲しいよ」
「俺は初対面からこうでしたけど……王都のお偉いさん方に怒られても知りませんよ」
「私が許されてるのは積荷の運搬だけだがね。つまり、彼らは喋る荷物というわけだね！」
「ただのヘリクツですね」
二人にとってはよくあることのようで、言葉の割には深刻な雰囲気はない。
「あの、本当に良かったんですか？」
エリーナが遠慮がちに尋ねる。
「星船の権限は王都が握ってますが、物資の輸送も重要な国父の一つですからね。自分達が苦労せずに動かせる船長の星船って、ある意味では貴重なものなんですよ」
ドロシーは気に入った人しか星船に乗せる気はないらしく、特に大きな問題にはなっていないらしい。
「それじゃ、積荷もこれで最後なんで、さっさと運んでしまいますね」
カルノは肩を軽く回した。
「では私の星船に案内しようじゃないか！」
ドロシーがウキウキした様子で船内に入っていく。
トマス達もそれに続いた。
船底の部分には、所狭しと積荷が運び込まれている。

生活雑貨から、魔術書らしきものまで、その内容は実に様々だ。
積荷の間を縫うようにして階段へとたどり着くと、上へと登っていく。
ほんのかすかだが、空気の流れるような音が聞こえてくる。
いくつかの部屋を通り過ぎた後、彼女が一つの部屋へと入っていく。
「うぉ……こりゃ、すげぇな……」
ガストンが驚いた声を上げた。
「フフン、ここが星船の操舵室というわけさ！」
その部屋は、床、壁、天井に至るまで、びっしりとスクロールで埋め尽くされていた。
いくつものスクロールが折り重なり、複雑な模様を描きながら、部屋の真ん中に集約されている。
真ん中には、普通の船と同じような舵輪が設置されており、その周囲には八つの方角それぞれ一本ずつと、真ん中に細くて長い、計九本の魔術によるトーチが設置されていた。
今は着陸しているからなのか、どのトーチにも明かりは点いていない。
「中には初めて入ったけど、これはすごいね」
周囲を埋め尽くすスクロールに、トマスは圧倒される。
エリーナは声も出ないのか、ただただ、スクロールを眺めている。
「そうだろう、そうだろう。まずはコレを見て驚いてもらわないとね。星船からの挨拶代わりってやつさ」
ドロシーはそれぞれの反応に満足したのか、腕組みをしながらうなずいていた。

「船長、積み込み終わったんで、離陸してもいいですかね？」
後ろからカルノがやってきて、彼女に尋ねる。
「ちょうどいいや。このまま見てもらおうじゃないか」
ドロシーが楽しそうな顔で快諾する。
見世物じゃないんですけどねぇ……とカルノが言いながら、舵輪を握る。
ガコン、と音がして、彼が舵輪を手前へと少し引いた。
どうやら二段構造になっているらしい。
慣れた手つきで舵輪を右へ回すと、真ん中の細長いトーチの根元が、ほんのりと光り始める。
それに合わせるように、船外で風の音が聞こえ始めてくる。
彼がゆっくりと舵輪を回し続けていると、やがて身体が宙に浮いたような感覚がしてくる。
それと同時にトーチの光が力強いものになり、ゆっくりではあるが、上に登り始める。
「本当に飛ぶんですねぇ……」
エリーナが夢でも見ているような様子で言った。
「なぁ、思ったんだが、こんな何も見えねえ部屋の中で動かしても大丈夫なのか？」
操舵室の様子に圧倒されていたトマスも、ガストンの言葉にふと気づいた。
部屋には窓らしいものがなく、外の様子は伺えないのである。
「不安になる気持ちは分かるがね。スクロールを張る場所は少しでも欲しいし、空に障害

物があるわけでもなし。こっちなら、大雨にずぶ濡れにならずに済むだろう？」
よくある質問なのか、ドロシーが案内嬢のように、すらすらと答える。
「周りの様子を見ながら操縦するときは、デッキにある方を使いますが、動力室に近いこっちの方がパワーは出るんで、状況に応じて使い分けているんです」
カルノが補足説明を加える。
「……見事な魔術陣の組み合わせだわ。かなりの腕利きが作ったものなのね」
星船が動き始めてから、縦横無尽に明滅するスクロールを見て、リサがつぶやいた。
「やっぱり、リサ君はそっちかね。一人だけ静かだったから、つまらないなあとは思っていたんだ」
「……それで？　この星船の動力源は何なのかしら？　まさか魔術鉱石を湯水のように使っているわけでもないのでしょう？」
「あはっ、やっぱそこが気になる？　少し動かすだけなら、それでもいけるらしいけどね」
ドロシーは待ってましたと言わんばかりに、にやぁっと笑った。
魔術鉱石とは魔力を含んだ石のことで、高価な武具に使われていると、トマスも聞いたことがあった。
ドロシーはリサの質問には答えずに、クスクスと笑いながら部屋を出ていく。
トマス達を連れて、別の部屋へと移動する。
ある部屋の前にたどり着いたドロシーは、クイクイとまるで対戦相手を挑発するかのように、リサを招き寄せる。

リサを先頭に部屋の中に入っていく。
部屋の中は操舵室と同じように、スクロールで埋め尽くされていた。
操舵室との違いは、部屋の中央に何かが安置されていることだった。
リサが部屋の中央に近づいていった。
「――っ！？」
顔を近づけると、彼女は驚いたのか、大きく肩が跳ねた。
「こ、これってっ――」
ばっとドロシーに顔を向ける。
「ふふふ、いい反応するねぇ。大量の物資を積み込んだ星船がどうして浮くのか、理解できたかね？」
「そんなにすごいものの？」
トマス達も興味津々で近づいた。
「すごいもなにも……これ、マナクリスタルじゃない！」
「なんだって！」
ガストンが慌てた様子でリサの隣に立った。
トマスとエリーナもそれに続く。
「正確にはカケラだがね。丸々一個というわけでもなし、そんなに大したものでもないさ」
安置されていたのは、小さな宝石のようなものだった。
大きさは、トマスの手の平に乗せれる小石ぐらいに見える。

淡い緑色の燐光を発しながら、その光がスクロールへと流れていく。
「マジかよ……本物なんて初めて見たぜ……」
ガストンが、言葉を絞り出すようにしてつぶやいた。
「それは、私の大じい様が見つけてきたものなのさ。そんな小さな石ころ程度の大きさじゃあ、大した使い道はないと思うがね。でも曲がりなりにもマナクリスタルなんだし、せっかくだから有効活用しようと思ったわけさ」
「……道理で王都が介入したがるわけだわ。星船もそうだけど、こんなもの、個人の手にあっていいものじゃないわ」
マナクリスタルとは、地中深くに埋まっているとされる、膨大な魔力を秘めた鉱物のことで、滅多にお目にかかれるものではない。
大昔から存在すると言われているが、秘めている魔力の総量は現在でも計測不能であり、一説には大気中のマナを吸収して、魔力にしているのではないかと言われている。
国に一個存在するだけで、周辺諸国の力関係さえも変えかねない程のものである。
そんな一抱え程もある鉱物のマナクリスタルだが、それだけの影響力があるにも関わらず、有効活用できる方法は意外と少ない。
理由は単純明快で、秘めている魔力が膨大過ぎて、人間の手に負えないのだ。
魔術に特化した種族であるエルフ族ですら、首を横に振るしかないという。
だがそれでも無尽蔵の魔力を秘めていることに変わりはなく、自然放出される魔力を汲み取って有効活用すれば、大きな利益になると言われている。

「この部屋と操舵室のスクロールで、マナクリスタルを制御してるのか？」
ガストンが尋ねる。
「まさか。カケラとはいえ、マナクリスタルだよ？　制御なんてそんなご大層なものじゃあない」
「星船はマナクリスタルのカケラから放出された魔力を、そのまま風の魔術に変換しているだけなんです」
後ろからやってきたカルノが付け加える。
「着陸しているときなんか、なーんにもしてなくても魔力は垂れ流しっぱなしなのさ。もったいない話だねぇ」
ドロシーは口ではそう言うものの、あまり気にしていないようだ。
彼女にとっては星船が動きさえすれば、それ以外のことはどうでもいいのだろう。
「空を飛ぶ魔術ってあるの？」
トマスはリサの方を見た。
「……あるわけないでしょう、そんなもの。この星船が浮いているのは、風の魔術をずっと使い続けているからよ。それこそ無尽蔵の魔力を持つマナクリスタルでもないと不可能だわ。それと、マナクリスタルは、それぞれから引き出せる力が決まっているの」
つまり、この星船にあるカケラからは、風の魔術にしか転用できないということらしい。
「大じい様なんか、暑いときに役に立ったとか言ってたよ？」
「……なんてことに使ってるのよ」

ドロシーがいたずらっぽい顔でペロッと舌を出すと、リサは顔に手を当てて嘆いていた。
「マナクリスタル……ですか……私、どこかで聞いたことあるような……」
エリーナが、マナクリスタルのカケラを、じっと見つめながらつぶやいた。
淡い燐光に照らされた彼女の横顔は、どこか神々しさを漂わせていた。
「マナクリスタルの伝説は、あちこちにあるからね。エリーナ君に聞き覚えがあっても不思議ではないさ」
ドロシーが肩を竦める。
マナクリスタルのカケラは、星船の動力源であると共に、風の魔術で結界を張って船体を防護するのにも使っているらしい。
「動力の足しになるかと思って、帆を上空で使ってみたんだが、穴だらけになってしまってね。船体はバラバラになりそうだったし、危うく大陸の外にある、ムツカグラまで吹き飛ばされるところだったよ。ふふふっ」
「いや、それは笑えねえだろ」
ガストンが呆れた顔をする。
「ありゃあマジでヤバかったです。死ぬかと思いましたから」
「なぁに、冒険にスリルは付きものさ」
とはいえ、離着陸の微調整として使ったりと、全く出番がないわけではないらしい。
マナクリスタルに関する話が落ち着いたところで、トマス達は動力室を後にする。
「さて、それではカルノ君、晩御飯の準備は任せたよ」

「……また俺ですか。たまには自分でやってくださいよ」
部屋を出て早々、ドロシーがそんなことを言ってのける。
「星船の操縦はいいんですか？」
エリーナが不思議そうな顔をする。
「星船の操縦って、そんなに難しいものじゃないんですよ。今は離陸した直後ですし、大雑把な方角だけ示しておけば大丈夫なんです」
「それに星船は、地上や陸から離れれば離れる程、速度が落ちるんだ。フェーレまで着くのに丸一日かかるんだなぁこれが」
「へぇ……マナクリスタルも万能じゃないのね」
リサが意外そうな表情を浮かべる。
「そりゃそうさ。そうじゃなけりゃ、私の手の中に納まったりしないさ。ちなみに私の星船は、武装の搭載は許可されてないんだ。私が反乱など企てようものなら、ノロノロ運航の星船なんか、大砲一発で撃墜されてしまうのだよ」
「え、武器なんかもダメなのか？」
「冒険者がするような、個人の武装は構いませんけどね。さすがにその辺りは、王都のチェックも厳しいです」
「そういうことだから、何かあったときは、諸君に任せるよ。私は土の魔術しか使えないんだ。空にいることが多いのに、これは皮肉でしかないねぇ……アハハッ、こりゃ愉快だ」
ドロシーは何が面白いのか、自分の言ったことにウケている。

そして、いたずらっぽい顔でチラリとトマスの方を見やった。
「まぁ……トマス君も似たようなものだよね」
「……見てたの？」
トマスは苦笑いを浮かべる。
「リサ君が見事な魔術を披露しているのに、トマス君は……ぷぷっ、そよ風も起こらなかったねぇ……」
「船長が飛び出していったのは、それを見たからですか。なんで慌てて走っていったのか、ずっと不思議だったんですよ」
カルノは納得した様子で、ため息をついた。

・空中都市フェーレ

ドロシーの案内で、次の日にデッキへと移動したトマス達が見たのは、おとぎ話に出てきそうな光景だった。

どこを見渡しても、雲、雲、雲。

視界に広がるのは、果てまで続く真っ白な世界だった。

雲海のすき間にひっそりと収まるように、その都市はあった。

それは文字通り、空に浮いた大陸である。

その都市の街並みは、大理石のように真っ白なものが多い。

空中に浮いているからか、他国からの侵略を受けるようなこともないらしく、古い立派な建物も所々に見受けられる。

土地が限られているという事情からなのか、縦に細長い建物がいくつも建っていた。

星船が着陸したときの様子は、思っていたよりも普通だった。

てっきり街の人々が、大人数で殺到してくるのかと思ったが、すっかり慣れてしまっているらしく、ああ、また来たのか、というような感じだった。

まるで駅馬車のような反応である。

「本当に地上と変わらないんだね」
「ふふっ、何だいその反応は。英雄のように出迎えてほしかったのかね？」
トマスが正直な感想を口にすると、ドロシーは、してやったりといった感じで、ニヤニヤしていた。
彼女は皮のカバンをプラプラと手にしている。
トマス達は、彼女に案内してもらいながら、フェーレの街中を歩いている。
最初は積荷を下ろす作業を始めるのかと思ったが、まずは責任者に挨拶をするのが、ここでの取り決めらしい。
彼女が言っていた通り、空に浮いているということ以外は、至って普通の街だった。
街の人達が奇抜な格好をしていたり、自分達を奇異の目で見るようなこともない。
高い建物が比較的多いのは珍しいものの、他の街との大きな違いは、それぐらいしかなかった。
「着いたよ。ここが目的地さ」
ドロシーが足を止めたのは、まるで神殿のような建物だった。

・あとがき

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。
体験版はいかがでしたでしょうか？
この後、彼らは大きな出来事に巻き込まれていくことになります。
なお、製品版には、ささやかですが、おまけの短編も付いてます。
それでは製品版でお会いできることを願っております。
貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。

・長い時のなかで

高価な羊皮紙に、羽ペンがカリカリと走る音が小さく響いた。
ゆらゆらと机のランプが手元を柔らかく照らしている。
部屋の中で自分以外の物音はなく、静かなものだった。
キリのいいところで手を止めると、彼はふと窓に目を向けた。
既に日は落ちており、真っ暗だったが、かすかに雲が流れていくのが見える。
ここまでくるのに、本当に長かった。
彼が一息ついていると、部屋の外の廊下からトコトコと足音が聞こえてくる。
「もう、またこんな夜までやってる」
ドアを開けて開口一番、少女は呆れた顔で言った。
彼の元まで歩いてくると、木のカップを手渡してくる。
ほんのりと温かい。
「いつもすまないな」
「そう思ってるんなら、ありがとうって言ってほしいな」
少女がじいっと彼を見つめる。
「そうだったな。いつもありがとう」

「よろしい」
少女は満足したのか、ヘンと胸をはった。
温かいカップの中身をゆっくりと一口飲んだ彼は、それを机に置いた。
「長いことかかってしまったが、もうすぐだよ」
「ホント！？」
少女はその言葉を聞くや否や、目を輝かせて身を乗り出した。
「ああ、本当だよ。待たせてすまなかったな」
彼は愛おしそうに少女を抱き寄せる。
「もう……私、そんな子供じゃないよ」
口ではそう言っているが、少女の方も身を寄せてくる。
「寂しかったか？」
彼は壊れ物を扱うように、少女の髪をゆっくりとなでた。
「……ううん」
少女は、甘えるように頭を彼の胸に押し付ける。
返事が言葉通りの意味ではないことは、他ならぬ彼自身が一番よく知っている。
辺りは静かな空気に包まれていた。
このときの二人の心は、とても温かいものだった。

・新たなる出会い

トマス・オーネルは立ち上がると、背筋を伸ばして腰をトントンと叩いた。
柔らかな日差しが、くすんだ金髪に降り注いでおり、今日も外はいい天気だった。
心地いい風が、くたびれた旅装を揺らしていく。
「こんなもので良かったかしら？」
「ありがとう。これだけあれば十分だよ」
藍色のとんがり帽子に黒いローブ姿の少女、リサ・ワーズノースが歩み寄ってきた。
濡れ羽色の髪を長く伸ばしている彼女は、一流の魔術師にして冒険者である。
トマスはもう一人の少女の方を向いた。
「そっちはどうだい？」
「今持っていきますね」
「うわ、いっぱい採れたねぇ」
「えへへ。摘み始めたら、なんだか楽しくなってきちゃいました」
エリーナ・アステルは楽しそうに茶色の瞳を細めた。
持ってきた薬草の量は、二人の倍ぐらいありそうだった。
彼女は頭を赤いハンカチで包み、肩より少し伸ばした茶色の髪は、耳元の一房だけを三

つ編みにしていて、黄色いブラウスと、ハンカチと同じ色のスカートの上から、エプロンをしていた。

髪の間からは、ドワーフ族の証である、控えめに尖った耳が可愛らしくのぞいている。

「こういうのも、ドワーフ族ではよくあることなの？」

「さあ、どうなんでしょうか？　土を触るのは楽しかったですけどね」

不思議に思ったトマスは尋ねてみたが、ドワーフ族の能力ということではないらしい。

トマス達はエリーナの故郷であるスタラントの村を出発し、王都を目指していた。

いくつかの街や村を通り過ぎて、クネスの街に到着したその翌朝、薬草を摘みに街はずれにやってきたのである。

スタラントの村で使ってしまったポーションを補充するのと、この先の旅で必要になるであろうお金を、薬売りであるトマスが稼ぐためでもあった。

地面に置いてある皮のリュックに薬草をしまい終えると、リサが口を開いた。

「さて、薬草も摘んだことだし、もう一度やってみるわよ」

彼女はそう言って、二人から少し距離をとった。

深い海のような色をしている切れ長の瞳をそっと閉じると、同じ色の宝石がついた杖を草原に向けてまっすぐに構える。

彼女が魔術の詠唱を始めると、途中から折れているとんがり帽子とローブが風にはためき始める。

魔術は大気中にあるマナと、自分の魔力を混ぜ合わせることで使うことができるのだ。

詠唱が終わって杖を一振りすると、強い風が巻き起こった。
草原が真っ二つに分かれる。
彼女はトマスに振り返った。
「ほら、教えた通りにやってみなさい」
「よし、やってみるよ」
「トマスさん、頑張ってください」
エリーナの応援を背に受けながら、トマスは身構える。
「風よ……大いなる渦の形となりて、我が敵を引き裂け！ウインドスラッシャー！」
詠唱が終わると同時に、強い風が巻き起こった。
……街はずれの草原は、少し時が止まったかのようだった。
リサと全く同じ詠唱をして、魔力も確かに練り上げたはずなのに、何も起こらない。
彼女は深々とため息をついた。
「まぁ……予想はしてたけどね」
「おかしいなぁ、ちゃんとできたと思ったんだけどな……」
「全くもって分からないね。初級のウインドはすぐ使えるようになったのに」
「これ、結構難しい魔術なの？」
「全然。見習いの魔術師でも使える子、普通にいるわよ」
「うむむ……」
見習いの魔術師と比べられて納得いかない表情を浮かべるトマスは、手の平をじいっと

見つめたりしてみるが、それで使えるようになるはずもない。
魔術というのは、向き不向きの素質が人によってある程度決まっている。
苦手な魔術に関しては、全く使えない者も珍しくない。
初級の魔術は使えたのだから、練習を続ければ使える可能性はあるのかもしれないが、今のところ芽が出る様子はなかった。
「じゃあ、氷の魔術は？」
「そっちはもっと期待できないわね。大人しくスクロールに頼ってなさい」
「あ、そう……」
トマスはがくりと首をたれた。
スクロールというのは、魔術陣が書き込まれた紙のことで、魔力を込めるだけで使える便利なもののことである。
ただし、大抵は一度きりの使い捨てで、何度も使えるものは値が張るのである。
「焦ったって仕方ありませんよ。長いこと薬草摘んでいましたし、お昼にしませんか？」
エリーナが慰めるように提案する。
「そうだね。一旦クネスの街まで引き上げようか」
三人が街に引き返そうとしたそのときだった。
エリーナが控えめに尖った耳をピクリと震わせると、草原の奥にある森の方に顔を向ける。
「何かがこちらに向かってきます！」

トマスとリサは、その言葉に気を引き締める。
ガサッガサガサッ
森の中から飛び出してきたのは、草原などでよく見かけるモンスター、グラスゴブリンだった。
普通のゴブリンと比べて、やや明るい緑色をしている。
折れた剣や粗末なこん棒など、不ぞろいの武器を手に、十体程が群れで襲ってきた。
「エリーナ！　頼むよ！」
「はいっ」
エリーナは腰から護身用の小さな投げ斧を引き抜くと、こちらに迫ってくるグラスゴブリン達の足元に狙いを定めて、斧を投げつける。
ヒュンッと風を切る音を響かせて地面に衝突した斧は、大量の土を派手にめくり上げて、グラスゴブリン達に浴びせかけた。
ドワーフ族であるエリーナは、人間であるトマス達よりも優れた腕の力を持っている。
威嚇ではあるものの、その威力は土の魔術に匹敵する程である。
グラスゴブリン達の中に慌てふためく者が出始める。
「炎よ……獣の形となりて、我が敵を焼き尽くせ！　フレイムビースト！」
リサがそのスキをついて炎の魔術を放った。
生み出された炎は四本足のトラのような形になって、グラスゴブリンに突っ込んでいく。
魔術師は自分の衣服に特殊な魔術を施すことで、身体だけではなく、身に着けた衣服か

らもマナを取り込むことができるのだ。
丈の長いローブやとんがり帽子、髪を長く伸ばしているのもそのためだ。
「ギャアアァァァ！！」
グラスゴブリン達が次々と焼かれていくが、広い場所で戦っているせいか、運よく避けることができた者もいたようだ。
トマスは腰からやや短めのブロードソードを引き抜くと、生き残ったグラスゴブリン達に斬りかかる。
エリーナとリサの手によって、群れは既に壊滅しかかっていた。
倒れたグラスゴブリンの間を縫うように、走りながらトマスが剣を振るっていくと、生き残っていた者達も後を追うようにバタバタと倒れていった。
生き残りがいないことを確認して一息ついたトマスは、エリーナの方を振り返った。
「エリーナ、いつもありがとう」
「いえいえ。私も一緒に旅をしてるんですから、できることをやらないと」
「そんなに気負わなくても大丈夫よ」
斧を回収しているエリーナを眺めながら、トマスはふと思いついたことを尋ねる。
「エリーナ、他の斧は投げられるのかい？」
護身用の斧は、柄の長いとんかち程度の大きさである。
「村で練習してたときに、いくつか試したことはありましたから、一挺か二挺ぐらいなら他の斧でも投げられると思いますよ」

「へぇ……そうなんだ」
ドワーフの村では十歳になる頃には、親から練習させられる話は前に聞いたことがあった。
トマスは森の方へと視線を向ける。
「……何であんな群れが飛び出してきたんだろう」
「確かにそこは気になるところね」
あれだけの群れが一度に出てくることは、滅多にあることではない。
エリーナが感じた様子からしても、こちらを察知して……という風でもなさそうである。
一体何が起こっているのかと三人が考えていたときだった。
エリーナがまたもや振り向くのと、何かが飛び出してくるのは同時だった。
「この野郎！　大人しく待ちやがれってんだ！　……お、おぉ？」
飛び出してきた何者かは、地面に倒れているグラスゴブリン達に驚いていた。

・再会

「わーはっはっは。まさかグラスゴブリン共を追いかけているうちに、お前に出会えるとはな！　ほんと、ビックリしたぞ」
「分かったから離してってば。ちょっと痛いんだけど」
赤銅色の髪の彼は大笑いすると、呆れているトマスの肩をぐいっと引き寄せた。
あれからトマス達は街はずれの草原を引き返して、クネスの街に戻ってきた。
お昼がまだだったので、そのまま彼と一緒に食堂へと向かうことになったのだ。
「それにしてもお前、一人で旅してるって聞いてたんだが、いつの間にかパーティなんて組んじまって、それも綺麗な魔術師の子に、ドワーフ族の可愛い女の子ときたもんだ。お前も隅に置けねえなぁ？」
彼はトマスにニヤニヤした笑みを向ける。
「あのねぇ……僕がどうして旅に出たか、お前は知ってるでしょーが」
「まぁな」
彼はトマスの呆れた顔に満足したのか、肩から手を離すと、笑みを浮かべたままリサとエリーナの方に顔を向ける。
「魔術師さんの方はグラスゴブリンのやられようから、相当な腕前なのは間違いない。ど

う考えても、トマスと釣り合うようには見えないんだよな。んで、そっちのドワーフさんは冒険者って感じでもない。村にいるごく普通の女の子のように俺は感じた。……そんな二人がこいつと一緒にいるってことは……」

今まで成り行きに任せていたリサだったが、彼が言い終わる前に、トマスに真剣な表情を向ける。

「ふっ……そう怖い顔しなさんな。そもそも俺がここまで来たのは、こいつの手助けをするつもりだったからなんだよ。つまり二人は……シズク絡みってことだよな？」

最後だけは彼の声が小さくなった。

イデアのシズク。

それは死んだトマスの父が探してほしいと、トマスに託したものだった。

それが一体何なのかは分からない。

だが、今では大切な願いだったのではないかと思っている。

「……じゃあ、あなたもそうなの？」

リサは真剣な表情を崩さないまま、彼に尋ねる。

「正直なところ、半々ってところだな。俺のオヤジもトマスのオヤジさん達の仲間だったらしくて、一緒に旅してたらしいんだ。だが、身体をダメにしちまったらしくてな。途中でリタイアってわけさ」

「でも、今も生きていらっしゃるなら、詳しい話が聞けるんじゃないんですか？」

エリーナが至極当然な意見を口にする。

「それは難しい話なんだよ、エリーナ」
トマスは苦笑いを浮かべた。
「ど、どうしてですか？」
「トマスのオヤジさん達が死んじまったってのもあるとは思うんだが、オヤジの奴、そのことになると急にダンマリになっちまうんだ。俺はともかく、トマスから聞いても話さない辺り、よっぽどのことなんだろうな」
「そうなんですか……」
「ま、だからって何もしないわけにもいかないしな」
彼はそこで一旦言葉を切った。
リサとエリーナに向きなおる。
「遅くなったが、俺はガストン・ベルナール。この春に王都の騎士養成学校を卒業した自由騎士にして、トマスの小さい頃からのダチってやつさ」
そう言って彼は、二人に自由騎士の証である、小さな赤いメダルを見せる。
彼は赤銅色の髪を短く刈り上げていて、全身を覆うプレートメイルと腰にはバスタードソードという出で立ちだった。
イスにはバックラーとロングスピアが立てかけられている。
少女達も自己紹介をする。
「私はエリーナ・アステルって言います。バックパッカーを担当させてもらってます」
バックパッカーとは、荷運び兼パーティー支援役のことである。

エリーナの隣には、トマスのものより二回りは大きい皮のリュックがあった。
「見ての通り、魔術師をやってるわ。……名前はリサ・ワーズノース」
「ん？　ワーズノースってのは……」
「あーはいはい、言いたいことは分かったから」
「ははっ、相当苦労してるみたいだな。これ以上は何も言わねえよ」
「ええ。そうしてくれると助かるわ」
リサはこのやり取りを何度も経験しているのか、うんざりした顔をする。
「この春に卒業……ね、そういえば、もうそんな時期だったわね。……なるほど、あなたがトマスの言っていた彼だったってわけね」
「お？　何だ何だ、俺のこと知ってたのか？」
「二人には、大体のことは話してあるからね」
「そりゃそうか。こんな突拍子もない話、正直に話さないと信じてくれないわな」
「王都の騎士なんてすごいんですね」
その言葉に、ガストンは苦笑いを浮かべる。
「エリーナちゃんにそう言ってもらえるのは嬉しいんだが、俺は平民だからなぁ……騎士を目指す貴族様達の練習相手でしかないのさ」
「ふん、大体騎士なんて、なろうと思ってなれるようなものでもないのよ。それなのに騎士養成学校だなんて、貴族のプライド丸出しみたいで恥ずかしくないのかしら。素直に練兵所とでも言えばいいんだわ」

「ミもフタもねえ言い方だなぁ……まぁ、俺もその意見には賛成だけどよ」
騎士養成学校は、誰でも入れるものの、卒業して正式な騎士になれるのは貴族だけだ。
平民出身の者は、貴族と仲良くなって従騎士にしてもらったり、王都が斡旋している兵士になるなどの道がある。
そしてもう一つ、王都が用意した道が自由騎士である。
要は冒険者なのだが、他の者との違いは授与される小さな赤いメダルにある。
これを持つ限り、自由騎士は魔術師ギルドで優遇してもらえるのだ。
魔術師ギルドは、冒険者の数が減ってきている今では、実質冒険者ギルドのようなものである。
「貴族の方と一緒の学校ですか……やっぱり卒業するときは、お城に呼ばれたりするんですか？」
「まさか。俺達なんて、ただだっ広い広場に集められて、『諸君、この王都のために立ち上がろうではないか』とか何とか、ありがたい話を聞かされて、それでおしまいさ。貴族の奴らは今頃叙任式でもやってるんだろうけどな」
話が一段落したところで、頼んでいた昼食が運ばれてきた。
ガストンが明るい性格なのもあってか、二人とはすぐに馴染めたようで、トマスは一安心だった。
楽しい雰囲気のまま昼食が終わると、店員が食器を回収しながら、飲み物のお代わりを尋ねてくる。

既にお昼も過ぎていたからか、客はトマス達だけになっていた。
「やっとトマスと再会できたんだ。エールといきたいところだが、果実酒にしとくか」
「僕は果実水で」
「私も果実水にしようかしら。エリーナはどうするの？」
「私も果実……水でお願いします」
「分かったわ。すみません、果実酒と果実水、二つずつでお願いします」
その瞬間、エリーナの耳がピクッと動いた。
「リ、リサさんっ」
「あら、何かしら？」
奥へと下がる店員を見送りつつ、リサが涼しい顔で返事をする。
「私、果実水って言いましたよねっ」
「そうだったかしら？　果実酒も果実水も似てるから、気をつけないといけなかったわね。ごめんなさい」
「エリーナ、遠慮しなくていいよ」
「むー」
エリーナが顔を赤くしながら、リサをじろーっと睨むが、リサはどこ吹く風だ。
「ぷっ、お前ら見てると退屈しねえな」
ガストンが吹き出した。
一緒に旅を始めた頃は、実はトマスも気づかなかったことだった。

よくよく考えてみれば、ドワーフ族はお酒が好きなことぐらい当たり前のことなのだが、エリーナはトマスとリサに遠慮してか、自分からお酒を頼むことは全くなかったのだ。

しかし、毎日顔を合わせていると、食事をするたびに、彼女がほんの少しではあるが、妙に物足りなさそうにしていることに、段々と気づいてくるのである。

二人で一緒に何度か尋ねると、彼女は顔を真っ赤にしながら、ようやく答えてくれたのだった。

それでも今みたいに、半ば強引に頼んだりして、やっと口にする程度で、普段は滅多に飲まないのである。

彼女なりに、この旅を真剣に考えているのだと、トマスには分かったが、時には息抜きも必要だ。

リサがこうして時々頼むのは、エリーナを気遣っているからなのだろう。

「さて、と」

リサは懐から書物といくつかの道具を取り出すと、羽ペンで何か書き込み始める。

「それは何だい？」

「魔術書よ。簡単に言えば、自分専用の何度も使えるスクロールってところかしら。一人で旅してたときは必要だとは思わなかったけど、誰かさんといると、いつ危険な目に合うか分からないからね」

「そ、そっか。あはは……」

リサが恨めしそうにトマスを見ると、トマスは苦笑いを浮かべるしかない。

「そういや、二人とどうやって知り合ったのか、聞いてなかったが、その様子だと何かあったみたいだな？　聞かせてくれよ」
「ん、まぁ、色々ね」
「……色々なんてものじゃないでしょう？」
「私はトマスさんに感謝していますよ」
リサが、あなたから話しなさいよと言わんばかりに、含みのある言い方をする。
その一方で、エリーナは優しく微笑んでいた。
頼んだ飲み物が運ばれてきたのをきっかけに、トマスはガストンに話すことにした。
トマス達が知り合うことになったのは、エリーナの故郷、ドワーフの村のスタラントでの出来事だった。
そこでトマスは困っていたエリーナと出会い、宿屋の酒場でリサと出会うことになる。
火竜の洞窟へ探検に出かけた三人は、最深部で石碑と封印された宝石を発見するも、採掘団の護衛の手によって封印は解かれてしまい、宝石の中から出てきたのは、巨大なドラゴンだった。
危うく村が壊滅しそうになるものの、リサの封印魔術で何とか危機を脱したのだった。
その後は、互いの家族が仲間であったことが分かり、今に至るというわけだ。
トマスの懐には、リサの魔術でドラゴンを封印した宝石――炎のシズクがある。
「ドラゴンなんてすげえな……どうやら、一筋縄ではいかなさそうだな」
ガストンは、真剣な表情で腕組みをしながら話を聞いていた。

「……まぁ、そんなことがあって、手がかりらしいものは、今は全くないんだ。だから一度王都に戻って情報を集めてみようと思うんだ」
「そうだな。今のところはそれが無難かもしれないな」
ガストンも納得して話がまとまりかけたときだった。
――ゴオオォォ……ォォ……ン……
食堂の外から、大気を振るわせるような音が響いてきた。
街の人達が音のする場所へと、駆けていくような足音も聞こえてくる。
「あら、珍しいわね。こんなところに星船が着陸するなんて」
「え、星船？」
トマスはその言葉を聞いた途端、ギクリとする。
「あ、あのさぁ、もうご飯も済んだことだし、そろそろ宿の方へ行かないかい？」
足元に置いてあった皮のリュックを、トマスは慌てて背負い始める。
「え？　まだ昼をちょっと過ぎたぐらいだろ？　早くねえか？」
いきなりの提案に、ガストンが目をパチクリとしている。
「ほ、ほらっ、夜になって泊るところがなくなっても困るじゃないか。そうでしょ？　何事も準備はちゃんとしておくべき――」
「いや素晴らしい！　全くもってその通りだね！」
突如そんな声が後ろから聞こえてきたかと思うと、トマスは皮のリュックをバシッと叩かれた。

突然の出来事にびっくりしたトマスだったが、やがて深いため息をついた。
食堂の店員も何事かと、こちらを見ている。
客がトマス達だけになっていたのは幸いだった。
「いきなりですまないが、失礼するよ」
「あ、ちょっと」
声の主である少女は、トマスの皮のリュックに手を突っ込んだ。
慣れた手つきでポーションを取り出すと、勝手に栓を開けてグビグビと飲み始めてしまった。
年若い娘が優雅な仕草で飲んでいるので、様になっているように見えるが、やっていることは酒場の飲んだくれと同じである。
「ふぅ……トマス君、随分と腕を上げたじゃないか。はいコレお代ね」
「ど、どうも……」
トマスの手には多過ぎる代金が乗せられていた。
いきなりの展開に、トマス以外の三人はポカンとしている。
「ほら、さっさと私をみんなに紹介したらどうだね？　仲間の方々が困ってしまっているじゃないか」
トマスは顔を手で覆うと、もう一度深いため息をついた。
「えーっと……この人は僕の知り合いの商人で、ドロシー・ウィッキンズって言うんだ。僕を見かけるたびに、こんなことしてる変な商人さんなんだよ」

「失礼だね君は！　トマス君の作るポーションは美味しいから仕方ないのだ。それに私は星船の船長なのだよ！」

彼女はビシッと指を立てて、ポーズを決めた。

レースのブラウスに、高価そうなシルクのロングスカート、と……ここだけを見れば貴族のお嬢様と言われても納得できそうな服装なのだが、被っているハンチング帽は日に焼けて色あせており、羽織っている皮の上着は、あちこち擦れている上に、隅の方は、ほつれたままになっていて、なんともちぐはぐな格好の少女だった。

初対面の人は判断に困るだろうなとトマスはいつも思う。

「へぇ……俺達とそう歳も変わらなさそうなのに、すげぇんだな」

そんな容姿に構わず、ガストンが素直な感想を言うと、彼女は満足したのか何度もうなずいた。

「うむうむ。実に素晴らしい反応だよ。素直でよろしい。……ところでトマス君、私と一生を共にする覚悟はできたかね？」

「一生をって……えぇっ」

何を想像したのか、エリーナが驚いた顔をする。

「エリーナ、あまり本気にしちゃダメだよ」

「こらこら、トマス君。そうあっさりとバラさないでくれたまえ。私がイケメン君好みなのは確かだがね。言っちゃあ何だが、トマス君は私の好みじゃないねぇ」

「……何でこんなところで着陸したのさ？」

「そりゃ君、今王都のお城では、騎士達の叙任式の真っ最中だからね。これ以上王都を騒がしくするなとのお達しなのさ」
どうやら王都の代わりとして、クネスの街を着陸先に選んだらしい。
「船って……海を渡る乗り物ですよね？」
山育ちのエリーナには、星船というのが、いまいちピンとこないようだ。
「チッチッチ、違うんだな。私の船はなんと、空を飛ぶのだよ！」
ドロシーが人差し指を左右に振ったかと思うと、大仰な仕草で両腕を広げた。
星船は、夜に船を下から見上げた人々が、まるで星々の中に浮いているように見えたことから、その名が付いたと言われている。
「はぁ……すごいんですねぇ……」
エリーナが感嘆の言葉を口にするが、どっちかというとドロシーの大袈裟な仕草に呑まれているようにも見える。
「フフフ……星船さえあれば、どこへでもビュンビュン行けるからねぇ」
ドロシーは星船の持ち主ではあるものの、形式的には王都の所有物であり、それを借り受けている契約になっているそうだ。
離着陸する場所も、逐一王都に報告する形になっており、言葉通りに自由に動かせるわけではないらしい。
だが、彼女にしてみれば、そんなものは些細なことなのだろう。
「よし、トマス君の顔を眺めるのにも飽きてきた頃だし、そろそろ本題に入ろうじゃない

か。ここで会ったのも何かの縁だ。君達、私の星船に乗る気はないかね？」
「……一体何を考えてるのさ」
トマスは呆れた顔をする。
「何、深い意味はないよ。ただ、その方が面白くなるのではないかと私は思うのだよ！」
「ごめん、真面目に聞いた僕が間違ってたよ」
「そんなにつまらない顔をしないでおくれ。まだとっておきのネタがあるんだ。今回の行き先はなんと、空中都市のフェーレなのだ！」
その言葉にガストンが目を見開いた。
「フェーレって……あのフェーレなのか？」
「アハハッ、面白いね君は。私もあちこち行った経験はあるが、地上にもフェーレという場所があるのかい？　そんな面白い情報があるなら、早く教えてくれたまえよ」
空中都市フェーレ。
それは文字通り、空に浮かんでいる大陸にある都市のことである。
地上との距離は、高価な望遠鏡でやっと観測できる程であり、地上の人が気づくことはまずない。
星船自体が、まだ開発されて間もない物であるため、最近になってようやくその名が広まり始めたというわけだ。
「……みんな、どうする？」
いきなりの提案に、当惑するトマスだったが、仲間達に声をかける。

「これといった目的地があったわけじゃねえけどなぁ……」
腕組みをしているガストンは、考えがまとまらないようだ。
エリーナも星船のことを知ったばかりなのもあってか、似たような様子だった。
「私は行ってみてもいいと思うわ」
そんな中リサだけは、はっきりと賛成意見を示した。
彼女に全員の視線が集中する。
魔術書と道具をしまいながら、彼女は言葉を続ける。
「フェーレなんて、行こうと思って行ける場所じゃないし、行く機会もそうそうないわ。……そうだとは思わない？」
トマスをじっと見て話す彼女が、何を言いたいのかすぐに分かった。
確かな手がかりがない今の状態では、どこへ行こうとある意味においては同じことである。　であるならば、行ける機会の限られた場所へ行ってみるというのは、確かに一つの選択肢ではある。
「そうだね。リサの言う通りかもしれない」
トマスはチラッと、ガストンとエリーナの方を見た。
「決まりだな」
「みなさんがそう決めたのなら、私は構いません」
二人はすぐに察したようで、真面目な表情でうなずいた。
「そんなに真面目な顔しなくても、フェーレは怖い所じゃないよー？　地上の街となーん

にも変わらないから、安心してくれたまえ」
興味津々な顔で成り行きを見守っていたドロシーだったが、自分の望む結果になって満足したようだった。

・星船

食堂を後にしたトマス達は、ドロシーの案内で街はずれまでやってくる。
そこには大きな星船が着陸していた。
外からの見た目は、普通の船とそこまで変わらないが、陸の上に船があるのは、慣れないうちは違和感を感じるかもしれない。
普通の船と違い、人の出入りするところだけ、外板がぽっかりと開いていた。
出入口のすぐそばで、青年が羊皮紙を片手に積荷の確認をしている。
トマス達が近づいていくと、彼が顔を上げた。
彼はくしゃくしゃの髪に、腕まくりしたシャツと長ズボンというラフな格好で、腰にはツールベルトがあった。
「おや、トマスさん。お久しぶりですね」
「久しぶり。元気そうですね」
「ぼちぼちやってますよ」
彼はドロシーの方に顔を向けると、疲れた様子を見せる。
「船長、人だかりの相手と積荷の積み降ろしを人に押し付けて、一体何やってんですか」
「トマス君のポーションを飲んでた！」

「はぁ……すいませんね、ウチの船長が迷惑かけたみたいで。代金十倍ぐらいふんだくっちゃって構いませんから」
「失礼だな君は！　ちゃんとお金は払ったとも！」
「どーせ返事も聞かずに、勝手に飲んだんじゃないんですか？」
「ピンポーン！　正解！」
彼はトマスとドロシー以外の仲間達に顔を向ける。
ぼぉっとしてるように見えるが、これでも彼にとっては真面目な表情である。
「初めての方もいるようですが、いつまでたっても船長が紹介してくれないので、自分から言わせてもらいますね。俺はカルノ・トゥランテって言います。船長の下で雑務やら何やら助手みたいなことやってます。元々は盗賊なんですけどね」
盗賊とはいっても、魔術師ギルドで登録するときの職業名であって、野盗の類ではない。
リサ達の方も、それぞれ自己紹介を済ませる。
「フフッ、魔術師ギルドで捨てられたネコみたいになってたから、私が拾ってあげたのだ！」
「はぁ……こんなことになるなら、付いていかなきゃよかったですかねぇ……」
彼はため息と共に、頭をポリポリとかいた。
「それで船長、今度はどんな悪だくみを思いついたんです？」
「トマス君といい、君といい失礼だなぁ。私はただ面白そうなことをしただけなのに。彼らを星船に乗せてあげようと思ってね」

「……またですか。どうせフェーレまで連れてって『どうだい、私の星船はすごいだろう！』とかやりたいだけでしょうが……」
「むぅ……最近は君もすっかりツレなくなってしまったな。私は悲しいよ」
「俺は初対面からこうでしたけど……王都のお偉いさん方に怒られても知りませんよ」
「私が許されてるのは積荷の運搬だけだがね。つまり、彼らは喋る荷物というわけだね！」
「ただのヘリクツですね」
二人にとってはよくあることのようで、言葉の割には深刻な雰囲気はない。
「あの、本当に良かったんですか？」
エリーナが遠慮がちに尋ねる。
「星船の権限は王都が握ってますが、物資の輸送も重要な国父の一つですからね。自分達が苦労せずに動かせる船長の星船って、ある意味では貴重なものなんですよ」
ドロシーは気に入った人しか星船に乗せる気はないらしく、特に大きな問題にはなっていないらしい。
「それじゃ、積荷もこれで最後なんで、さっさと運んでしまいますね」
カルノは肩を軽く回した。
「では私の星船に案内しようじゃないか！」
ドロシーがウキウキした様子で船内に入っていく。
トマス達もそれに続いた。
船底の部分には、所狭しと積荷が運び込まれている。

生活雑貨から、魔術書らしきものまで、その内容は実に様々だ。
積荷の間を縫うようにして階段へとたどり着くと、上へと登っていく。
ほんのかすかだが、空気の流れるような音が聞こえてくる。
いくつかの部屋を通り過ぎた後、彼女が一つの部屋へと入っていく。
「うぉ……こりゃ、すげぇな……」
ガストンが驚いた声を上げた。
「フフン、ここが星船の操舵室というわけさ！」
その部屋は、床、壁、天井に至るまで、びっしりとスクロールで埋め尽くされていた。
いくつものスクロールが折り重なり、複雑な模様を描きながら、部屋の真ん中に集約されている。
真ん中には、普通の船と同じような舵輪が設置されており、その周囲には八つの方角それぞれ一本ずつと、真ん中に細くて長い、計九本の魔術によるトーチが設置されていた。
今は着陸しているからなのか、どのトーチにも明かりは点いていない。
「中には初めて入ったけど、これはすごいね」
周囲を埋め尽くすスクロールに、トマスは圧倒される。
エリーナは声も出ないのか、ただただ、スクロールを眺めている。
「そうだろう、そうだろう。まずはコレを見て驚いてもらわないとね。星船からの挨拶代わりってやつさ」
ドロシーはそれぞれの反応に満足したのか、腕組みをしながらうなずいていた。

「船長、積み込み終わったんで、離陸してもいいですかね？」
後ろからカルノがやってきて、彼女に尋ねる。
「ちょうどいいや。このまま見てもらおうじゃないか」
ドロシーが楽しそうな顔で快諾する。
見世物じゃないんですけどねぇ……とカルノが言いながら、舵輪を握る。
ガコン、と音がして、彼が舵輪を手前へと少し引いた。
どうやら二段構造になっているらしい。
慣れた手つきで舵輪を右へ回すと、真ん中の細長いトーチの根元が、ほんのりと光り始める。
それに合わせるように、船外で風の音が聞こえ始めてくる。
彼がゆっくりと舵輪を回し続けていると、やがて身体が宙に浮いたような感覚がしてくる。
それと同時にトーチの光が力強いものになり、ゆっくりではあるが、上に登り始める。
「本当に飛ぶんですねぇ……」
エリーナが夢でも見ているような様子で言った。
「なぁ、思ったんだが、こんな何も見えねえ部屋の中で動かしても大丈夫なのか？」
操舵室の様子に圧倒されていたトマスも、ガストンの言葉にふと気づいた。
部屋には窓らしいものがなく、外の様子は伺えないのである。
「不安になる気持ちは分かるがね。スクロールを張る場所は少しでも欲しいし、空に障害

物があるわけでもなし。こっちなら、大雨にずぶ濡れにならずに済むだろう？」
よくある質問なのか、ドロシーが案内嬢のように、すらすらと答える。
「周りの様子を見ながら操縦するときは、デッキにある方を使いますが、動力室に近いこっちの方がパワーは出るんで、状況に応じて使い分けているんです」
カルノが補足説明を加える。
「……見事な魔術陣の組み合わせだわ。かなりの腕利きが作ったものなのね」
星船が動き始めてから、縦横無尽に明滅するスクロールを見て、リサがつぶやいた。
「やっぱり、リサ君はそっちかね。一人だけ静かだったから、つまらないなあとは思っていたんだ」
「……それで？　この星船の動力源は何なのかしら？　まさか魔術鉱石を湯水のように使っているわけでもないのでしょう？」
「あはっ、やっぱそこが気になる？　少し動かすだけなら、それでもいけるらしいけどね」
ドロシーは待ってましたと言わんばかりに、にやぁっと笑った。
魔術鉱石とは魔力を含んだ石のことで、高価な武具に使われていると、トマスも聞いたことがあった。
ドロシーはリサの質問には答えずに、クスクスと笑いながら部屋を出ていく。
トマス達を連れて、別の部屋へと移動する。
ある部屋の前にたどり着いたドロシーは、クイクイとまるで対戦相手を挑発するかのように、リサを招き寄せる。

リサを先頭に部屋の中に入っていく。
部屋の中は操舵室と同じように、スクロールで埋め尽くされていた。
操舵室との違いは、部屋の中央に何かが安置されていることだった。
リサが部屋の中央に近づいていった。
「――っ！？」
顔を近づけると、彼女は驚いたのか、大きく肩が跳ねた。
「こ、これってっ――」
ばっとドロシーに顔を向ける。
「ふふふ、いい反応するねぇ。大量の物資を積み込んだ星船がどうして浮くのか、理解できたかね？」
「そんなにすごいものの？」
トマス達も興味津々で近づいた。
「すごいもなにも……これ、マナクリスタルじゃない！」
「なんだって！」
ガストンが慌てた様子でリサの隣に立った。
トマスとエリーナもそれに続く。
「正確にはカケラだがね。丸々一個というわけでもなし、そんなに大したものでもないさ」
安置されていたのは、小さな宝石のようなものだった。
大きさは、トマスの手の平に乗せれる小石ぐらいに見える。

淡い緑色の燐光を発しながら、その光がスクロールへと流れていく。
「マジかよ……本物なんて初めて見たぜ……」
ガストンが、言葉を絞り出すようにしてつぶやいた。
「それは、私の大じい様が見つけてきたものなのさ。そんな小さな石ころ程度の大きさじゃあ、大した使い道はないと思うがね。でも曲がりなりにもマナクリスタルなんだし、せっかくだから有効活用しようと思ったわけさ」
「……道理で王都が介入したがるわけだわ。星船もそうだけど、こんなもの、個人の手にあっていいものじゃないわ」
マナクリスタルとは、地中深くに埋まっているとされる、膨大な魔力を秘めた鉱物のことで、滅多にお目にかかれるものではない。
大昔から存在すると言われているが、秘めている魔力の総量は現在でも計測不能であり、一説には大気中のマナを吸収して、魔力にしているのではないかと言われている。
国に一個存在するだけで、周辺諸国の力関係さえも変えかねない程のものである。
そんな一抱え程もある鉱物のマナクリスタルだが、それだけの影響力があるにも関わらず、有効活用できる方法は意外と少ない。
理由は単純明快で、秘めている魔力が膨大過ぎて、人間の手に負えないのだ。
魔術に特化した種族であるエルフ族ですら、首を横に振るしかないという。
だがそれでも無尽蔵の魔力を秘めていることに変わりはなく、自然放出される魔力を汲み取って有効活用すれば、大きな利益になると言われている。

「この部屋と操舵室のスクロールで、マナクリスタルを制御してるのか？」
ガストンが尋ねる。
「まさか。カケラとはいえ、マナクリスタルだよ？　制御なんてそんなご大層なものじゃあない」
「星船はマナクリスタルのカケラから放出された魔力を、そのまま風の魔術に変換しているだけなんです」
後ろからやってきたカルノが付け加える。
「着陸しているときなんか、なーんにもしてなくても魔力は垂れ流しっぱなしなのさ。もったいない話だねぇ」
ドロシーは口ではそう言うものの、あまり気にしていないようだ。
彼女にとっては星船が動きさえすれば、それ以外のことはどうでもいいのだろう。
「空を飛ぶ魔術ってあるの？」
トマスはリサの方を見た。
「……あるわけないでしょう、そんなもの。この星船が浮いているのは、風の魔術をずっと使い続けているからよ。それこそ無尽蔵の魔力を持つマナクリスタルでもないと不可能だわ。それと、マナクリスタルは、それぞれから引き出せる力が決まっているの」
つまり、この星船にあるカケラからは、風の魔術にしか転用できないということらしい。
「大じい様なんか、暑いときに役に立ったとか言ってたよ？」
「……なんてことに使ってるのよ」

ドロシーがいたずらっぽい顔でペロッと舌を出すと、リサは顔に手を当てて嘆いていた。
「マナクリスタル……ですか……私、どこかで聞いたことあるような……」
エリーナが、マナクリスタルのカケラを、じっと見つめながらつぶやいた。
淡い燐光に照らされた彼女の横顔は、どこか神々しさを漂わせていた。
「マナクリスタルの伝説は、あちこちにあるからね。エリーナ君に聞き覚えがあっても不思議ではないさ」
ドロシーが肩を竦める。
マナクリスタルのカケラは、星船の動力源であると共に、風の魔術で結界を張って船体を防護するのにも使っているらしい。
「動力の足しになるかと思って、帆を上空で使ってみたんだが、穴だらけになってしまってね。船体はバラバラになりそうだったし、危うく大陸の外にある、ムツカグラまで吹き飛ばされるところだったよ。ふふふっ」
「いや、それは笑えねえだろ」
ガストンが呆れた顔をする。
「ありゃあマジでヤバかったです。死ぬかと思いましたから」
「なぁに、冒険にスリルは付きものさ」
とはいえ、離着陸の微調整として使ったりと、全く出番がないわけではないらしい。
マナクリスタルに関する話が落ち着いたところで、トマス達は動力室を後にする。
「さて、それではカルノ君、晩御飯の準備は任せたよ」

「……また俺ですか。たまには自分でやってくださいよ」
部屋を出て早々、ドロシーがそんなことを言ってのける。
「星船の操縦はいいんですか？」
エリーナが不思議そうな顔をする。
「星船の操縦って、そんなに難しいものじゃないんですよ。今は離陸した直後ですし、大雑把な方角だけ示しておけば大丈夫なんです」
「それに星船は、地上や陸から離れれば離れる程、速度が落ちるんだ。フェーレまで着くのに丸一日かかるんだなぁこれが」
「へぇ……マナクリスタルも万能じゃないのね」
リサが意外そうな表情を浮かべる。
「そりゃそうさ。そうじゃなけりゃ、私の手の中に納まったりしないさ。ちなみに私の星船は、武装の搭載は許可されてないんだ。私が反乱など企てようものなら、ノロノロ運航の星船なんか、大砲一発で撃墜されてしまうのだよ」
「え、武器なんかもダメなのか？」
「冒険者がするような、個人の武装は構いませんけどね。さすがにその辺りは、王都のチェックも厳しいです」
「そういうことだから、何かあったときは、諸君に任せるよ。私は土の魔術しか使えないんだ。空にいることが多いのに、これは皮肉でしかないねぇ……アハハッ、こりゃ愉快だ」
ドロシーは何が面白いのか、自分の言ったことにウケている。

そして、いたずらっぽい顔でチラリとトマスの方を見やった。
「まぁ……トマス君も似たようなものだよね」
「……見てたの？」
トマスは苦笑いを浮かべる。
「リサ君が見事な魔術を披露しているのに、トマス君は……ぷぷっ、そよ風も起こらなかったねぇ……」
「船長が飛び出していったのは、それを見たからですか。なんで慌てて走っていったのか、ずっと不思議だったんですよ」
カルノは納得した様子で、ため息をついた。

・空中都市フェーレ

ドロシーの案内で、次の日にデッキへと移動したトマス達が見たのは、おとぎ話に出てきそうな光景だった。

どこを見渡しても、雲、雲、雲。

視界に広がるのは、果てまで続く真っ白な世界だった。

雲海のすき間にひっそりと収まるように、その都市はあった。

それは文字通り、空に浮いた大陸である。

その都市の街並みは、大理石のように真っ白なものが多い。

空中に浮いているからか、他国からの侵略を受けるようなこともないらしく、古い立派な建物も所々に見受けられる。

土地が限られているという事情からなのか、縦に細長い建物がいくつも建っていた。

星船が着陸したときの様子は、思っていたよりも普通だった。

てっきり街の人々が、大人数で殺到してくるのかと思ったが、すっかり慣れてしまっているらしく、ああ、また来たのか、というような感じだった。

まるで駅馬車のような反応である。

「本当に地上と変わらないんだね」
「ふふっ、何だいその反応は。英雄のように出迎えてほしかったのかね？」
トマスが正直な感想を口にすると、ドロシーは、してやったりといった感じで、ニヤニヤしていた。
彼女は皮のカバンをプラプラと手にしている。
トマス達は、彼女に案内してもらいながら、フェーレの街中を歩いている。
最初は積荷を下ろす作業を始めるのかと思ったが、まずは責任者に挨拶をするのが、ここでの取り決めらしい。
彼女が言っていた通り、空に浮いているということ以外は、至って普通の街だった。
街の人達が奇抜な格好をしていたり、自分達を奇異の目で見るようなこともない。
高い建物が比較的多いのは珍しいものの、他の街との大きな違いは、それぐらいしかなかった。
「着いたよ。ここが目的地さ」
ドロシーが足を止めたのは、まるで神殿のような建物だった。

・あとがき

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。
体験版はいかがでしたでしょうか？
この後、彼らは大きな出来事に巻き込まれていくことになります。
なお、製品版には、ささやかですが、おまけの短編も付いてます。
それでは製品版でお会いできることを願っております。
貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。

・本作品の画像及び文章の無断転載・複製・再配布・改変などはご遠慮下さい。

・イラストをブログやＳＮＳ等のアイコンや素材としての二次利用など、イラストレーター様のご迷惑となるような行為はご遠慮願います。

・本作品に関して発生したトラブルによる一切の責任を負いません。

・本作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。